

三井嘉都夫先生の思い出

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

20

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

124

(発行年 / Year)

1992-03-31

「三井嘉都夫先生の思い出」執筆者一覧

(掲載順)

泉 久三郎 (環境科学研究会常務理事)
大 矢 雅 彦 (早稲田大学教育学部教授)
沖 野 外輝夫 (信州大学理学部教授)
阪 口 豊 (専修大学文学部教授)
山 嵯 謹 哉 (専修大学文学部教授)
吉 野 正 敏 (愛知大学文学部教授・日本地理学会会長)

.....
鳴 澤 巖 (法政大学文学部教授)
佐々木 茂 (法政大学通信教育部指導講師)
野 田 亘 (法政大学第二教養部教授)
濱 田 義 文 (法政大学文学部教授)
廣 岡 治 哉 (法政大学経営学部教授)
堀 江 拓 充 (法政大学文学部教授・文学部長)
丸 山 節 夫 (法政大学企画室部長)
村 上 直 (法政大学文学部教授)

.....
大 和 裕 子 (法政大学地理学会副会長・1948年度師卒)
岡 永 亮八郎 (法政大学地理学会副会長・1950年度師卒、1958年度院修了)
中 村 宗 敏 (法政大学地理学会副会長・1954年度学卒)
桑 原 正 見 (武蔵野女子学院高校・1956年度学卒・1960年度院修了)
清 水 靖 夫 (立教高校・1957年度学卒・1966年度院修了)
堀 道 也 (1957年度通卒)
大 関 保 (大成高校・1958年度学卒、1961年度院修了)
漆 原 和 子 (駒沢大学文学部教授・1964年度学卒、1970年度院修了)
井 上 奉 生 (法政大学第二教養部教授・1965年度学卒、1974年度院修了)
小 間 経 昭 (糸魚川市立糸魚川中学校・1965年度学卒)
長 沼 信 夫 (駒沢大学文学部教授・1968年度院修了)
山 本 恒 男 (高知県立中村養護学校・1968年度通卒)
土 田 邦 男 (千葉県立千城台高校・1969年度学卒、1972年度院修了)
船 山 幸 夫 (秋田県立秋田東高校・1970年度学卒)
佐 藤 正 史 (秋田県立由利高校・1971年度学卒)
宮垣津 繁 (法政大学通信教育部指導講師・1972年度学卒、1981年度院修了)
池 英 助 (国学院久我山高校・1975年度学卒、1982年度院修了)
中 村 圭 三 (千葉敬愛短期大学教授・1977年度院修了)
橋 爪 若 子 (文際学園・1978年度院修了)
熊 田 宏 (川口市立元郷中学校・1980年度学卒)
内 藤 次 郎 (1980年度学卒、1989年度院修了)
徳 竹 喜 義 (1985年度学卒)

<以上>

I G Cの旅と三井さん

泉 久三郎

(環境科学研究会常務理事)

三井さんとはいつごろからのお付き合いか思い出せないが、ずいぶん古い。長年お世話になっている中野尊正さんや高橋裕さんよりも少し前で、故人となられた安芸皎一さんよりは後だが、もう30年以上にはなると思う。

僕にとって三井さんは、I G Cとセットになっていてずいぶんいろんな国へ同行させていただき、楽しく、懐かしい思い出は尽きないのである。

1980年の夏、I G C東京大会で中野さんがたしか2つの分科会を主催されたが、そのときの三井さんの名アシスタントぶりには驚いた。僕も中野さんの下働きをしたが、ほとんど三井さんにおんぶしてのことだった。アメリカのホワイトさん、ソ連のゲランモフさんの両大御所を迎え、中野さんの気配りは大変なものだったが、三井さんの蔭の活躍ぶりには、改めて敬服した。

これをご縁に三井さんとは1984年にパリとカーンへ、1986年にはバルセロナとパルマへ、1988年にはシドニーへとご一緒させていただき、いつも大変お世話になった。

カーンに1週間いたある日、三井さんの研究報告が終ったので、「ちょっと」と言って1人で席を抜け出し、市街図を手に街をぶらついてみた。あの狂ったようなパリとは大違いで、落ち着いた奇麗な街並みは素晴しかった。

飽きずに見とれていたが夕刻になったのでホテルに帰ってみたら、同宿の三井さんも関口さんもまだだったので別のグループのいるホテルへ行ってみて驚いた。「言葉のできない泉さんが、こんな時間までどこをうろついているのだろう。道に迷ってどこかの交番にでもいるんじゃないか」と、手分けして探そうかと相談しているところだったというのである。いや、まいったが、非礼を深くお詫びしてご勘弁をいただいた。

しかし、皆さんにご迷惑をおかけし申し訳ないことをしたと、今でも反省している。

シドニーの会議のあと、1週間ほどニュージーランドの観光旅行をした。三井さんと橋爪さんの3人づれである。

例の羊の毛刈りを見たとき、最後に自家製という羊の敷物を並べて買ってくれという。おやじさんも妻君も精一杯のサービスぶりです。一行20人ほどがケーキと紅茶をご馳走になったんだが、誰も買おうと言う人がいない。たまりかねてつい「三井さん、1枚買いませんか」と口にしてしまったが、人情の機微というかなにか、白人や外国人たちと我々日本人とはどうもこの辺が違うようだ。出された送り先のノートを見たら日本人の名前がびっしり並んでいた。ひと月ほど経ってそれが届いたが、裏に「呂っ度笑（おやじの名前？）I Z U M I さん」とサインしてあった。商売も手馴れたものである。

半日タクシーで廻ったとき、大きな牧場に牛や羊ではなく茶黒い小馬のようなのが一杯いるのを見た。何だろと思うているうちに車が近づくと見事な鹿だった。運転手に聞いたら全部西ドイツからの委託飼育だという。それでわかった。先年ロマンチック街道の旅で、鹿肉料理の看板を随所で見かけたが、食用にするほどの鹿はどこにいるのかと、不思議でならなかったからだ。

ロンドンに数日滞在したある日、三井さんにかつて東京の三井さん宅にホームステイをしていた娘さんの家を訪ねるけれども同行しませんかと誘われた。オックスフォードだと言った。列車で出かけて、街をぶらついてからその住所を確かめたら、何とケンブリッジだったのだ。ここからは相当の距離である。タクシーで出かけたがずいぶん乗りでがかった。街の中心部から遠いところだったがようやく探し当てた。タクシーを待たせ

ておいてロンドンへ向ったが、夕方の交通渋滞はどこも同じで、ずいぶん時間がかかった。相当の距離と相当のタクシー代だったことを覚えている。“地理の先生でも、人間である以上は”とあとで大笑いしたが、思い違いはあるもので、三井さんには失礼だが忘れられない思い出になっている。

オリエント急行で、パリ東駅からミュンヘン2泊とウィーン2泊の旅を一緒にしたが、これは楽しかった。

深夜12時に発車し、早朝ザルツブルグに着いたが、乗降客の多いのに驚いた。さすがに音楽の都だ。昼ころミュンヘンに着いたら、駅のホームの先に大きな木のテーブルが2つ並んでいて、やっ
てゐる、飲ってる。早速こちらも、まず一杯。この

街は2度目だが、あの熱気に溢れるホフブローイハウスのジョッキの味が忘れられない。

ウィーンは美しい街だと聞いていたが、さすがであった。三井さんと例の馬車で一巡りした。中世、近世の面影が偲ばれる街並みと、ドナウの対岸に建つ近代的なビル群とが対照的だった。

幸運にもオペラ座で“蝶々夫人”を観た。3階の舞台の袖の席で上から見下ろしているので、蝶々さんの着付けのマズさ、白足袋は靴下、草履はサンダルなどアラが見えすぎてうんざりした。

休憩時間に社交ホールへ行ってみた。正装した年配のカップルも多く、グラスを手にして談笑の声も弾んでいた。僕もウイスキーを何杯か賞味しながら、「あー、これがウィーンなのだ」と旅の楽しさを味わった。

若き日の三井先生

大 矢 雅 彦

(早稲田大学教育学部教授)

月日のたつのは本当に速いものだと思います。三井先生が70才になられたと聞き耳を疑いました。私が三井先生に最初にお会いしたのは、大久保にありました資源科学研究所につとめておられた時で、おそらく30才代であったと思います。白い実験着を着て、決して奇麗ではないうす暗い研究所の中をいそがしくとびまわっておられた姿を思い出します。

三井先生は法政大学で勉強をされ、法政大学の教授になられた方ですが、若いうちはこの資源科学研究所で研究されました。この間に水の地理学的基础をつくられました。できることなら、私が三井先生にお会いする以前の研究所での生活をどなたかが書かれるとなおよいと思います。聞くとところによると、研究所で寝泊りをしながら研究を続けられたようで、今日の豊かな時代の学生あるいは研究者では想像もできない悪条件下で頑張ってこられたようです。

三井先生を学問的に育てられた方で忘れることのできないのは故多田文男教授です。多田先生と

三井先生との関係はとくに親しく、戦後の不自由な時代に一時多田先生の家で生活を共にされたと聞いております。多田先生は庶民的で非常に気さくな方でしたが、三井先生とこの点共通していたように思います。

多田先生は先を見ることのできる方でした。そして自然地理のうち、地形学と気候学はかなり進んだ、しかし、水の分野は未発達でまだ学問の体系をなしていない、これからは水の研究をすべきだとの考えを持っておられました。三井先生はこの指導にそって進まれたと思います。

三井先生と私は共に旅をする機会に恵まれました。資源科学研究所の仕事として下北半島へ調査にまいりました。今では想像もできない質素な調査で、夜行列車により、お寺を借り切って三週間も合宿で調査をしました。三井さんとはどんな困難にもめげず、調査を遂行し、また夜ともなればこよなく下北の酒を楽しんでおられた姿を思い出します。三井先生と下北の付き合いはその後もうずっと続いたようで、先日下北へ三井先生と行った大

学院学生が自動車の中で先生が「ああ、これで下北もお終いだ」と言われた時、何と返事してよいかわからなかったとのことでした。それほど下北の自然を、そして人々を愛されておりました。

このほか科学技術庁資源調査会の依頼で筑後川へ行ったこともあります。お酒の飲めない私に合せて、静かな瀬戸内海を立派な客船で旅して下さったこともあります。

1972年私は早大より派遣されてオランダのエンスケデという小さな町にある国際空中写真地理調査所(I.J.C.)で講師をつとめていました。その時ユーゴスラビアの調査の帰りによって下さいました。ユーゴスラビアの調査がよほど大変だったとみえ、オランダのI.J.C.の宿舎をととてもよろこんで下さったのを思い出します。そして、一夕、もっともオランダらしいデルフトの運河の近くの静かなレストランで食事を共にしました。

インドの国際地理学会で三井さんが発表された時には座長をしていたジョンズ・ホプキンス大学のウォルマン教授の賞讃を受けられました。

以上は何れも三井さんの若き日の思い出であります。

一般的に言って年をとると、新しい未知の国へ行くのは大変抵抗感を持つようになります。しかし、三井さんは年をとっても、新しい国々に出かけられます。フランスでお会いした時、これから言葉が通じない東欧の国々へ行く。どこまで独りで旅できるか試すのだと云っておられました。

聞くとところによるとタクラマカンの調査もはじめられました。70才の古稀をむかえられると云うのに、心はなお30代の若さで、未知の世界に挑戦しておられます。今後も今まで同様にいつまでも若々しく、活動していただきたいと願うものであります。

三井先生と資源科学研究所

沖 野 外 輝 夫

(信州大学理学部教授)

長良川河口堰建設が社会的問題となっている。陸水学会、生態学会といった直接関係の深い研究者の集まりでも声明が発表され、その見直しを要請する声は多い。長良川河口堰建設を含めて、木曾三川の事前調査が行われたのは1960年代後半であり、当時信州大学繊維学部的小泉清明教授が代表者であった。当時としては大規模な組織で取りくまれ、陸水学者をはじめとして、多くの研究者が参加、大部の報告書が公表されている。しかし、それから20年以上を経過した現在では、環境影響評価を目的として計画、組織されたものではない同調査結果は当然現時点では評価に耐えない部分があることを否定できない。

この木曾三川総合調査の3～4年前、財団法人資源科学研究所では中村守純先生を代表者として、利根川河口堰に関係する「利根川水産生物資源調査」が行われていた。内容は河口堰建設に当たっての事前調査である。水産生物については淡

水魚類が専門の中村守純先生が担当し、水質・生物環境を三井嘉都夫先生と倉沢秀夫先生が担当、筆者も若輩の身で参加していた。この調査で、塩水遡上、河川の水理等々、生物科学出身の筆者が三井、倉沢両先生に教わった数々の知識は現在でも大いに役立っており、記憶に残る感謝に耐えない調査であった。

筆者は1962年4月、資源科学研究所に助手として入所した。隣の部屋に研究室を構えておられたのが三井先生で、大学では学ぶことのなかった自然地理学の基本を、前述した調査を通して、実際に教えていただける幸運に恵まれた次第である。そんなわけで、三井先生の思い出は筆者にとって資源科学研究所での生活と二重写しになって思い出されるものである。

当時の調査はまだまだ機動力に欠けるものが多かった。キスリングをかついで、測定機器を手で運ぶ、肉体労働である。埼玉県の中小河川、利根

川と、途中バスを乗り継ぎながら、1日2〜3地点の観測をして移動する調査は、今から想うと悠長に感じるが、一面では楽しい、勉強になる野外実習とも言える。昼はバス待ちの間に先生から地域の解説を聞き、現場に着くと測定機器の取り扱い、現場のデータを直に見、身体で覚える機会となる。宿に着けば、夕食をはさんで先人の逸話、研究の事、社会の事、時には冗談など、即席のゼミナールが先生を中心に開講される。若い筆者達の耳には全てが新しく、新鮮な体験として血と肉となっていた。

利根川の調査では必ず泊る椎柴の菓子屋旅館、大きな部屋に先生を含めて若い我々も一緒に雑魚寝し、時には近所の火事騒ぎに驚かされたり、家人と親しくなったりした。現場でなくては得られない地域の環境測定技術と地域研究の基礎はここでの経験が大いに役立っている。その後、ネパールやアフリカの片田舎に行ってもそれ程苦にせず調査が行えたのもこの時の経験がものをいっている。

利根川は大河である（日本では）。自分達で舟を漕いでというわけにもいかない。舟頭さんに頼って20〜30kmを遡上る。測定地点に着けば忙しくても、途中は舟頭まかせの又とない野外観察の時間となる。帰りにはジミの土産物もあり家人に喜ばれることもあった。三井先生の調査は当時にしては結構機動力のある、移動距離の大きい調査でもあった。県庁の自動車を借りて面的な調査の経験をしたのも三井先生指揮の調査である。野帳の書き方、処理、筆者が覚えた研究の基本となるものも数多い。

もう一つ大切なことは調査前の準備、調査参加

者のマネジメントである。先生の人扱いは見事なものであった。誰も不満を言うことなく、結構しんどい仕事も和やかに遂行する。それでいて調査の中身は全て行ってしまうという人心掌握術であった。筆者がその術をどれ程盗み得たかは定かではないけれども、以後ずい分と役立っていることは確かである。

1965年頃と言えば先生の年齢は40才台の筈である。当時の先生は法政大学文学部教授であったと思うけれども、国立大学を停年後の二度目のお務めと誤解していた人も居た。それ程大人のであったということかもしれない。

資源科学研究所の先生の研究室の特徴は、非常に自由で、ざっくばらんな気風であった。勿論、先生自身は身内には大変厳しいという風評もお弟子さん達から聞いている。筆者のような隣の弟子には少々甘いところもあったのかもしれない。

資源科学研究所は閉所してすでに20年を越えているが、懐しい、想い出の多い研究所である。春には構内のソメイヨシノが道に花のトンネルをつくる。そんな時には夕方になると花の下にゴザを敷き花見酒となる。率先して現われるのが三井先生であり、地質の松井、桑野両先生、それにつられて事務の女性達が加わり、楽しい一時となる。今でも花見時になるとその光景が目につかぶ。

研究があまりにも時間に追われた、目的意識の強い現代ではあるけれども、資源科学研究所での自由な、貧乏ではあるけれども余裕のある生活と研究の体験は今でも若い研究者に必要なだろうか、とふと思う時、三井先生のお顔が目につかぶ。先生がいつまでもお元気で過されることを願って筆を置くことにする。

三井さんの印象

阪 口 豊

（専修大学文学部教授）

三井さんと初めてお目にかかったのがいつだったのか思い出せない。私は東京大学で恩師の多田文男先生について学部学生の時代から資源科学研

究所に入出入りしていた。多田先生は三井さんの恩師でもあり、その頃から親しくして頂いていたように思う。大学院生の時代には研究所の4日勤務

の非常勤所員になり、その後、東京大学の教官になってからも研究所が国立科学博物館と合併するまでかなり図図しく出入りさせて頂いていた。三井さんは研究所の2階の北側の一番東よりの部屋に陣取り、時代物の実験台とストーンテーブルの間の狭い空間に、これまた時代物の机を置くというよりは、はめ込んだといった恰好で、その前に小さな体をいつも白衣に包んですわっていた。

私は三井さんの部屋の向いの、元法政大学教授の浅井さんと市瀬さんの部屋の一隅を使わせて頂いていたが、一仕事終わった夕方に三井さんの部屋に顔を出すのを楽しみにしていた。三井さんは法政大学の二部を教えておられたので、いつもお会いできるというわけではなかったが、部屋におられる時には、また何人かの法政大学のお弟子さんがいることが多く、話がはずみ、時には中野駅前飲み屋にくり出すこともあった。

三井さんと一緒に調査や旅行をしたことも何回かあった。入所してすぐに行った総理府資源調査会の中川流域の調査では、見沼谷の泥炭地の調査を手伝って頂き、その成果をもう一人の方と3人の連名で資源研彙報に発表した。そのほか、埼玉県下の調査で2回ほど三井さんのお供をしたことがあるが、いずれも地下水関係の調査であったように思う。

同じ資源調査会の仕事で四国の吉野川流域の調査に御一緒したこともある。祖谷谷・阿波池田・林の土柱などを見た。徳島市の県知事公認のストリップ劇場で、かぶりつきで見ていた三井さんの満足げな顔が印象に残っている。

私がヨーロッパなどの遊学から帰った1970年の夏の初めに、三井さんから、当時千葉県庁にいた今は亡き白井さん（法政大卒）の案内で茂原・東金あたりをまわるエクスカージョンのお誘いをうけた。その目的が何であったか、お供の気軽さから何も憶えていないが、途中、白井さんのお宅に泊めて頂き、また東金の料理屋で歓待を受け、大変楽しい旅であった。文部省の環境科学特別研究の関係で現地討論を富士・吉原地区で行ったが、この時の現地のお膳立ては三井さんがやられた。私が三井さんと御一緒に旅行したのはこれが最後であった。

もっと三井さんと御一緒に旅行しているはずであるがどうしても思い出せない。そして旅行の時の三井さんの行状についても徳島のストリップ劇場以外はどうしても思い出せないのである。三井さんはお酒が強く乱れることがなく、いつもニコニコしておられるから、どんな場面でも、私の三井さんの印象はいつも研究所の部屋でお目に掛った時の笑顔の三井さんなのである。

私が資源研に入所した初めの頃、三井さんは病気というものを知らない不思議な存在であった。ある時身体の不調を説明するのを聞くと、どうやら風邪を引いたらしいことがわかった。お聞きするところによると、父君も病気知らずであったそう。人間は病気持ちの方が用心するのでかえって長生きするようだ。その後、三井さんも病気持ちになり、大病もされたと聞く。そしてめでたく古稀を迎えられた由、これからも益々お元気で笑顔を見せて下さることを祈っている。

三井先生とのご縁

山 寄 謹 哉

（専修大学文学部教授）

三井先生とは永いおつき合いでして、最初にお会いしたのが何時ごろであったのか、どういきっかけでおつき合いさせて頂くことになったのか、何せ古い話です。で今ではすっかり忘れてしまいました。

私の手元に昭和26年9月現在の「日本地理学会会員名簿」がありますが、それによりますと先生はその頃資源科学研究所（通称・資源研）に居られたようにうかがいます。もっとも先生は自然地理学、私は人文地理学ですので、お互いに地理学

研究として共通はしているものの、細かく言いますと専攻を異にしていますので、専攻を通してのおつき合いというものは全く無いといつてよいのです。やがて先生は先生の母校法政大学の若手教員として教壇に立たれることになり、当時私も専修大学の助手か講師の頃でしたので、お互いに隣組の大学に勤務致すことから意気が通うようになり、それからというものは今日もお先生とおつき合いさせて貰っているわけです。それに先生と私は同じ大正11年生れで、古風なことを言いますと笑いの種になるかも知れませんが、同じ成年生まれなものですから気性もよく似かよっていますので、先生とつい話が合うのかも知れません。

古今書院発行の雑誌「地理」に連載で全国国公立大学の「地理学教室案内」が載っていますが、同誌の34巻9号に先生が法政大学地理学教室の案内記事をお書きになっていますが、それを読みますと他大学の地理学教室にひけをとらない充実した法政地理を感じます。それはその裏方として何十年もの才月を頑張っておられた先生のお力添えがあったればこそという思いが致します。

また、先生には地理学教室の発展ばかりに尽くされただけではなく、母校法政大学の野球部長として東京六大学に法政大の野球部の名を轟かせられたとお聞きしていますし、理事として、学部長としても母校のためにご尽力されましたことは私もよく存じております。先生ほど母校のためお尽くしになられた方は他にそれほど多くはないと思います。

一寸大袈裟な言い方かも知れませんが、日々秒読みのスケジュールに追いまわられていらっしゃるご多忙な先生に、専修大学の講義をお願いしたことがありました。その時は急に担当者を見つけ

ねばならなかったのですが、正直いってなかなか見つからずとうとう先生にご無理を申しましたところ、実に快よくお引受け下さいまして「ほんと」しました。いまでもその時のありがたかったことはしっかりと覚えております。その頃の専修大学の地理学教室の機械器具類はいまほど充実していませんでしたので、さぞかし授業にご不便をお掛けしたのではなかったかと思っています。それでも先生には毎週練馬のお宅より生田校舎までお通い下さいました。先生がご出講下さる日に私も丁度出講していましたので、毎週先生とお会い出来るのを楽しみにしていました。持ち前の明るい性格は誰もが親しみを感じ、それがまた先生のお得なお人柄のせいだといえましょう。しかし、先生の専大通いも僅か二年でしたが、専修大学の学生にとってもその間は有益であったことと思います。先生が専修大学を辞められてから暫く法政大の先生が専修大学に来られるのは途絶えていましたが、現在は佐藤典人先生が専修大学に来ておられます。さすが三井先生が手塩にかけて指導されてきた方だけに、充実した授業をされ専修大学の学生も佐藤先生のご授業を楽しく聴講しています。

私もまた7、8年前から隔年ごとに法政大学に出講しています。以前は授業が終われば三井先生とお会いし、世間話をくさりやって帰るのを“くせ”にしていました。このところ私の都合で出講曜日を変えましたので、先生と久しくお会いしていませんが、それでもたまにお宅に電話を致しますと、相変わらずお元気なお声を聞くことで、私も頑張らねばと感じ入っています。

折角の先生とのご縁、今後も一層強く続いていくことを願っています。

「ナヌス」と三井嘉都夫先生

吉 野 正 敏

(愛知大学文学部教授・日本地理学会会長)

法政大学における1968年からの私の6年間には、三井先生に関するいろいろな思い出がある。

その中でどうしても忘れられないのはユーゴスラビアでの海外調査である。法政大学にとっても初

めて、私にとってももちろん初めての共同研究であった。日本から外国にでかけて行なう地理学的な海外調査は、グループで行なうにせよ個人で行なうにせよ、今日ではめずらしくない。しかし、その当時は数も少なく、ユーゴスラビアでは前例もなかった。

「関東平野に冬よく吹く“空っ風”は乾いていて冷めたい。日本海側では陰うつな天気で降雪、太平洋側は青空で乾いていることを思えば、これはフェーンである。しかし、どうして冷たいか。

“冷たい乾いたおろし風をボラという”ならば、“空っ風”はフェーンであるか、ボラであるか」

このような課題をもって、ボラの本場のユーゴスラビアのアドリア海岸で、局地風の調査をし、関東の“空っ風”と比較しようとして、共同研究を始めた。風ばかりでなく、局地風にかかわる水文・植生・土地利用などについても総合的に研究しようということで、三井先生もその調査隊の一人であった。

現在、大ゆれのユーゴスラビア連邦共和国は六つの国からなるが、その最北のスロベニアにはボラが非常に強いアイドフツチナ盆地がある。1970年秋のある日、われわれ数名の隊員はここに滞在して居た。風が吹く日は風向・風速などを測器を使って観測、風が吹かない日は偏形樹による風の推定のため、偏形樹を1本1本調べて廻るという毎日であった。

三井先生の偉いところは、こういうとき、風の観測や偏形樹の調査に全面的に参加し、全く隊員の一人として行動されることである。けっして、「水文学の専門家だから水の調査をやらせろ」と言わないところを、私は内心とても感心していた。先輩格の三井先生を私は“使ってしまった!!”ことにもなるが、隊全体の成果をあげるのには非常によかった。後で聞いたことだが、文部省の科学研究費によるあまたある海外調査の中でも、このユーゴスラビア調査は注目すべき成果をあげたそうだ。もしそうだとすれば、三井先生のこの姿勢が隊全体を動かしたためと思う。

偏形樹の調査は2人が1組になって調査地域を廻って調べる。調べた結果は、夜、隊員全部が

集ったところで報告し、地図にプロットしてゆく。偏形樹の測定項目は、当然、地点ごとに、その方向、グレード、樹種、樹高などで、これらがあらかじめ決められている。ここで問題なのは樹種である。方向はクリノメーター、グレード、樹高などは目測だから言葉を要しない。ところが樹種はその地域にたくさんあって名のわかっているのはよいが、どうしてもわからないものがある。サンプルの枝をとろうにも場合によっては不可能なこともある。

「その場合は、その土地の人たちの呼び名でよいから、それを聞いて記録して来い」

という隊長のきついお達しがでている。これを実行するにはスロベニア語ができなければならない筈だが、そこは隊長は知らぬふりをしている。

ある日の夕食後、例によってその日の結果を報告するミーティングが始った。「鈴鹿おろし」や「伊吹おろし」の研究を風の観測や偏形樹の調査で行ない、その論文でいまは理学博士の学位をとり、教授にもなっている大和田道雄君はその当時、確かまだ大学院生であった。三井先生は大和田君とグループになって調べて来たその日の偏形樹の測定結果を報告していた。

隊長が聞いた。

「その樹の名前は何と言うのかネ」

答があった。

「ナヌスです」

隊長もスロベニア語はからっきしダメなのだが、どこかでその名を聞いたと思った。が、それが何かは急には思いだせなかった。三井先生が続けた。

「やはり若い人は言葉を覚えるのが速いですナ。大和田君はその樹の名を農家の人にスロベニア語で聞いたのです。偏形している樹の幹に抱きついて何という名前なのか聞いたのですから確かです」

地図を見ながら、この報告を聞いていた隊長は地図に、Mt.Nanusという名を見つけた。結局、「農家の人は、その偏形樹のうしろにそびえる山の名を答えたのだ」という議論の結果となった。

「あの動物は何と呼ぶのか」

「カンガルー (I don't know) です」

という、オーストラリアでの白人と原住民の会話を似た物語を創造するところであった。その後、何度かこのナマスという山の近くを旅行したが、いつまでも三井先生と大和田君のナマス物語りは忘れられない。

三井先生の偉いところは、もうひとつある。こ

ういう偏形樹の調査をやりながら、水文学的資料を集め、研究をまとめられた点である。この号の読者は、三井先生が、法政大学文学部紀要や地理学評論に、ユーゴスラビアの水文学的研究の論文を発表されたことを知っていることと思う。

(元ユーゴスラビア研究調査隊長)

長くごいっしょした同僚として

鴨 澤 巖

(法政大学文学部教授)

法政の地理学科はむかし夜学だった。ぼくは1953年(昭和でいえば28年)の6月であったか、今は故人となられた多田文男先生から「明治でも法政でも好きな方に行きませんか」と、今の人が聞いたら卒倒しそうなありがたいお話しがあって、それまでどちらとも無縁だったから迷ってしまっていたが、どうも明治は労働がきついときいて、体に自信がなかっただけに一も二もなく、法政にお願いしますと御返事申し上げた。既知の小原先生、石母田先生、柘植先生などがおられたこともぼくを法政に傾かせた。9月からとりあえず非常勤講師、翌年4月から専任講師に採用され、三井先生と、また渡辺先生と同僚になった。

もっとも、その前からぞんじあげていた。というのは、法政の地理は、くりかえすが夜学だったから、スタッフは昼間はどこかよそにいて夜になると法政にくるのだが、その昼間、三井先生は大久保の資源科学研究所におられ、この資源科学研究所でしばしばお見かけしたのである。ぼくは同じ資源科学研究所に居られた入江敏夫先生を頻繁にお訪ねしたのであった。三井先生はたいい試験管を振っておられたが、その頃は相当に痩せておられた。今からは想像のほかである。

同僚としての長い年月のなかでもとくに忘れられないのは1970年前後の例の大学紛争の頃のことである。三井先生はつい最近物故された池島重信氏が学部長だったとき教授会主任を依頼され、池島先生がおやめになったあとはしばしば学部長の

任にあたられた。ぼくも紛争の盛りにやられたが、すぐ病気でたおれたためわずか半年でやめてしまい役立たずだったが、三井先生は頑健でかつ有能でおいでだから、長期にわたって難局に対処された。

法政では先年、長年総長をつとめられた中村哲先生が最後には石をもて追われるごとく法政を去られた。中村先生にたいする評価には、三井先生とぼくとで食い違いがあるように思うが、そのこととは別に、三井先生が長い間、たいへんな時期の文学部長として尽力された功績はたいへんなもので、文学部教授会の一員として感謝している。

三井先生の一面ということであるが、学生のコンパで、近頃はそんな雰囲気もさっぱりなくなってしまったが、かつては教員もしばしば歌を唱わされた。ぼくは自他共に認める音痴で、うっかり唱えば公害だからいかなる甘言にもけって唱わないのだが、三井先生は歌もお上手で気持ちよく唱われる。それはしばしば「おれは河原の枯れすすき」であり、ときに偽悪的に「芸者ワルツ」である。かなりお酒をきこしめたあるとき、多少吐き捨てる口調で、「小学唱歌みたいな行儀よいものは大嫌いだ」といわれた。偽善を感じられるのであろうか。これは、人生意気を感じる肌合でおられ、人をまず信じ、抱擁力に富む気質でおられることからきているのであろう。その気風は、思うに、おおらかな御家族の中で青少年期をすごされたうえに、近隣相助ける故郷吉原(静岡県)

の気風によっても培われたものなのではないだろうか。任侠の風も吹いているかもしれない。

三井先生は講義中に、御自分でしょっちゅういわれるように、よく「どなる」。学生がうるさくするからである。ぼくなどいい加減なもので、出席をとらなければうるさい学生なぞいなくなるとばかり、出席をとらない。だから静かなものである。だがこれは、学生には二通りあって、信用できる学生が一方にいるかたわら、他方には信用できない学生がいるという考え方かもしれない。三井先生は善人だからすべての学生を信用し、うるさくされるとその信用が裏切られたわけだから大声出してどなることになるのであろう。まったく偉いものである。

おやめになったらどうか体調に御留意になり、

人生の後半を充実しておすごしてください。以前三井先生にたいして人々は「胸がやけるってなんのことか知ってますか」とか「風邪ってひいたことがありますか」とか、からかったものである。それほど並みでない健康の持ち主でおられた。最近でも一向に衰えず、1991年の夏には「齢70に達してタクラマカンを訪れた人はあなたが初めて」と中国人も口あんぐりだったとか。ところで世間では、一病息災という。無病息災より一病息災の方がよいはずもないが一病あれば人は健康に留意するからであろう。どうか健康にお気をつけになって、楽しく充実した後半生をお送りください。

今まで長い間いろいろお世話になりました。あらためて、感謝いたします。

若かりし頃の三井先生

佐々木 茂

(法政大学通信教育部指導講師)

三井先生にはじめてお会いしたのは太平洋戦争後の社会混乱がまだ続いていた1948（昭23）年であった。暗い電燈の下で当時の食糧危機を打開するために荒蕪地の活用という面から砂丘草地について熱っぽく早口でしゃべりまくっていた。所は神田駿河台にあった定時制高等学校の木造校舎の一郭、「人文地理」の授業であった。先生は教科書にない問題をしばしば取り上げて授業中に話された。上記の他にも毒水問題や小貝川が利根川に合流する地にあった小文間村（現・取手市）を例にして水害問題をたんなる自然災害として片づけられないことを縷々述べられた。昼間の労働に疲れ空腹を抱えて登校してきた夜学生達は十二分に先生のお話を理解できただろうか。しかし、先生の熱心な授業には誰れしものが皆聞きいった。とりあげられる問題は戦争で荒廃した国土復興上、必要欠くべからざる問題であり、時事的にも最先端の問題であった。当時の先生は資源科学研究所の研究員であった。旧日本陸軍の化学研究所跡を利用した古色蒼然とした研究所であった。住宅不足の時

代であったので、先生は研究室に寝泊りされていた。先生は研究の傍ら私達が通う夜間高校の教師をされていた。ご自分が研究されている問題の一部をその時々授業にあわせてお話しくださったのだらう。ある時はご自分で5万分の一地形図の裏面を利用して（当時は物資不足のため模造紙などは入手困難だった）図表を作成し、黒板いっばいに貼付してお話されたこともあった。今にして思えば学会発表、研究会での発表のリハーサルをなさっていたのではないだろうか。私達は高校生でありながら大学なみの授業をうけていたことになり、大変幸せだったことと思う。とにかく先生の熱心な授業には皆敬服されていた。

その中、誰れ言うともなしに、先生が勤務されていらっしゃる研究所を訪ねてみようということになり級友数人でお伺いした。先生の研究室に通された。部屋の中に大きな木製の机（先生のご自宅の研究室で現在もご使用されている）や実験台、古ぼけた実験器具が所狭しと乱雑におかれていた。この時先生と何を話したかは忘れてしまっ

た。これを機会に私達は先生のご迷惑も考えずに度々研究所をお尋ねするようになった。ある時は研究室に泊めていただいたこともあった。戦争で学業を中断・足踏みさせられ、戦後夜間高校で勉強した私達にとって、学究一筋に生きる先生のお姿に深い感銘をうけた。研究室の雰囲気、学問への憧憬がより一層私達を先生に近づけた(後日談になるが1950(昭和25)年当時の世相からみて、夜間高校卒業後、級の大半が大学に進学したのは珍しいのではないと思う。これも先生の影響あつてのことと思う)。

当時(1950年頃)、先生の研究室には常に大きなリュックザックがおいてあった。河川水の採水器具一式が入れてあった。利根川、江戸川、荒川、多摩川等の河川水を一週一回定期的に採水し懸濁質を分析されていた。また豪雨があると不定期にも採水されていた。そのために何時でも出かけられるように採水器具一式を入れたリュックザックを用意されていたのでした。雨が降ると嬉嬉として出かけるので、ご自分のことを「雨蛙みたい」だと言っておられた。また雨の中、橋上から器具を川面に下ろして採水していると、弥次馬が雨中にも拘らず寄ってきて、じっと興味を持って水面を見つめており、汲み上げられてきたのが水だと分ると、「なあ〜んだ」と言わんばかりに散っていくと面白そうに話されたこともあった。

先生は学問だけのお人ではなかった。生徒に対して大変「情」に厚い人でもあった。1948(昭23)年頃の夜間高校に通う生徒は文字通り苦学生が多かった。「住み込み」という形で働きながら通学している生徒も多かった。職と「食・住」が一体

になっているので地方から上京して働きながら学ぶ者にとって便利であった。しかし、雇用主と意見が対立し「こんな仕事、止めます」と言って職場を飛び出す生徒もいた。職を失った時、「食・住」も失う。こんな生徒が先生の研究室に転がり込んでもきた。先生は生徒の良き相談相手となって下さり、2〜3日の「食・住」の面倒も見られていた。そして生徒を元の鞘に納めたり、新しい職場を世話したりもしていられちゃった。研究にお忙しい身でありながら生徒の面倒を本当によくみて下さった。

高校を卒業し大学に入学しても先生の許によく集まった。早大や千葉大など他大学に入学した者も研究室や、先生のご結婚後は新居にまで押しかけた。先生が渡良瀬川の河床変動をご研究されていた頃、早大生のYが学友を連れてきて、先生と一緒に渡良瀬川の中に入り煉瓦や礫の流送状況の調査を手伝っていた。専攻科目の全く違う他大学の学生がハイキングにでも来たように楽しそうに調査にお付き合いしていたのも先生のお人柄の一面を表わすのではないのでしょうか。40年も前のことが昨日のこのように懐かしく思い浮んできます。

下北半島の調査、中川流域の調査、その他数多くの調査で先生のお手伝いをさせていただきました。その度毎に数多くのことをお教えいただきました。曲りなりにも学問らしきものに取りすがりながら今日まで私がこられたのも、駿河台のあの木造校舎の教室で先生にお会いできたからです。私も頭に白髪を見るようになりました。これからも先生にお教えいただき学んでいきたいと思っています。

三井嘉都夫教授と私

野 田 亘

(法政大学第二教養部教授)

地理学に全く縁のない私が、三井先生を知ったのは、1964年、文学部の事務主任になったときである。ふり返ってみると係として日常の仕事を通じて、いろいろお世話になってから、今日までもう27

年にもなる。この間、三井先生を介して多田文男教授にもお近づきを願うことになった。多田先生は、まだ若かった私に何かと目をかけて下さり、私立大学はどうあらねばならないとか、そこに職

を奉ずる者の心得などについて細かい指導をもして下さった。丁度その頃、三井先生や地理学科の先生方と、アスワン・ハイダムの学術調査などを企画したが、これは予算の都合で実現しなかった。1960年代の後半といえば大学紛争が日増しに激しさを加えつつあった頃で、数少ないOB教授であられた三井先生の御心労は並大抵のものではなかったであろうとおそば近くにいて思ったものである。

1972年、庶務課長の時、地理学科の吉野正敏教授を団長とするユーゴスラビアの季節風「ボラ」の調査研究の隊員に加えていただいたので、大学からヨーロッパの大学事情視察の許可を貰い、同行した。もっぱら兵站要員ではあったが、いくらかお手伝いさせていだいたと思っている。この調査旅行でも三井先生に何かとお世話になったことは今も忘れられない。現在連邦軍とクロアチア側軍との内戦で揉めているユーゴスラビア・クロアチアのザグレブで、三井先生が以前講義をされたという教室を案内して貰ったが、あの大学は今度の内戦の混乱でどうなっているか、何となく気がかりである。

三井先生は一行より遅れてベオグラードで合流されたのであるが、そこで飲んだワインが特別美味しかった。最近の内戦のニュースを見るたびに三井先生とくみ交したワインの味を思い出し、往時を懐かしんでいる。

私はその後調査隊と別かれ、ヨーロッパを廻っ

て帰国した。それから数年たって、三井先生から「野球部長になってくれないかと声がかかっているのだが野球のことは全く知らないで迷っている。どうしたものだろう。」と相談を受けた。おそらく運動部のことなので私に相談があったのだろうと思う。私は「部長は野球を知らなくても、監督もおれば、コーチもいる。その点は全く心配はない。むしろ六大学の野球部長は、大体その大学の卒業の教授になっているのが当たり前で、他大学出の教授が部長になったら、六大学にならなくなる。三井先生、是非お受けになって下さい。」と言ったことを今でもはっきり記憶している。私の一言で決心されたかどうかはわからないが、とにかく三井野球部長が誕生した。

野球部がその後大学野球界で勝ち星を重ね今日に至っていることは、三井先生の部長としての目立たないお力が大いに貢献しているのではなかろうかと思う。

三井先生は地理学者として御自身の研究を重ねられるだけでなく、多くの卒業生を研究者として育て、なお、そのうえに野球部の学生、さらに他の運動部の学生までもよく面倒を見て下さった。このことは法政大学を愛し、後輩を育成しようとする先生の母校愛のあらわれであり、我々後輩の学ばなければならないところである。

おわりに、三井先生の益々の御壮健と御活躍を祈念して筆をおく。

三井嘉都夫教授を送る

濱 田 義 文

(法政大学文学部教授)

三井嘉都夫先生には、定年延長期限が満了して、いよいよ法政大学教授の地位を去られる。さぞ感無量のことと拝察される。先生は法政大学の出身であり、在職42年に及び、その間私が知るだけでも、学部長・大学院議長・理事等の学内の要職を歴任され、また野球部部長の大役もこなされた。文学部の文字通りの重鎮であり、先生の退職は文学部の歴史の一つの区切りをなすものと思われる。

る。学内外での先生の功績については然るべき人が語られるであろう。また先生の学問上の業績についても私は専門を異にするので語る資格がない。私は文学部の同僚として教授会や懇親会等の席を通じて自分の知る限りでの先生の人柄の一端について語ることにした。

私は昭和48年4月に熊本大学から法政大学文学部に転任したが、三井先生はその時の学部長で

あった。当時は全国を風靡した大学紛争がやっと鎮静化に向かっていった時期であったが、法政大学内ではまだ勢いが残っており、騒然たる日々の連続であった。私が出席した最初の教授会では大学構内の騒音のため審議が聞きとれないような有様であったことを記憶する。それが当然のような状態であり、学外に場所を移しての教授会もしばしばであった。その中で学部内を取り纏め、大学全体のかじ取りに懸命に奔走される学部長の姿が印象的であった。私は詳しい事情を知らず傍観するだけであったが、心中では学部長の苦勞の甚大であることを思った。しかし学部長は精力的に仕事をこなされただけでなく、明るい雰囲気でもって楽天的に行動されたように思う。当時の困難な状況の中で異例の2年間の学部長職を務めあげられたところに、三井先生の心身両面での強靱さと柔軟さが窺われる。

あれから早くも18~9年が過ぎたが、三井先生についての当時の印象は変らない。先生はその後も煩勞をいとわず、様々の機会を通じて学内の事態改善のために努力を続けられた。それは成果より苦勞の方が大きかったのではないと思われるが、それらの仕事を引き受けられたのは、持前の屈託のない積極的な性格によるだけでなく、法政大学に対する強い愛着によるものであったと思われる。その気持ちはさりげない言葉の端々に感じられ、時に厳しい批評の言葉の中にも感じる事ができた。先生は法政大学を生涯の活動の天地として心得られ、そこに大きな喜びを感じておられたに違いない。それが先生の人柄の、困難を乗り越える明るさや楽天性の秘密であると私は解する。二年前の法政大学の卒業式で、前大戦中の戦没学徒のための特別の卒業証書授与が行われたが、三井先生が令弟の遺影を掲げて卒業生席の最前列に着席された姿がふと眼に浮かぶ。

先生の開放的な人柄には、さらに地理学の中の陸水学を専門とされる研究の国際性も関連しているであろうと想像する。多くの外国旅行・探検・調査と外国生活の経験とが、視野の拡大と思考の幅広さをもたらしていると思われる。そこには旺盛な知的探究心があり、それが身軽で力強い行動

力と結びついている。いつか外国旅行から帰国されたその足で教授会に出席され、そのあとの会合で旅行の話を伺って、その精力的活動に感心したことがある。

今度、日中合同科学探検・法政大学タクラマカン沙漠調査が二年間で実施されることになり、先生はその総隊長になられた。タクラマカンとは、ウイグル語で「入れば出られない」という意味だと、先生は書いておられる(「法政」1991. 6)。日本の国土面積にはほぼ匹敵する世界第二の大砂漠であり、極乾燥地帯では昼夜の温度差が大きく、夏の日中は50℃近くまで上がり、夜は零下10℃になることもあるという。今回の調査はその中の河川流域の一部に限られるようだが、調査規模の雄大さと学術探検の意義の大きさは門外漢にも推察される。先生はその文章を「死の海への挑戦」と題しておられるが、先生の力強い意気込みが窺われる。多人数によって組織される日中合同探検調査の総隊長として先生はまさに適任であり、先生の法政大学での最後を飾るにふさわしい仕事であると思われる。この大事業の成功を私は祈っている。

先生が法政大学教授の地位を去られることは大変寂しいことであるが、しかし決して悲しむべき事柄ではあるまい。物事には初めがあり、そしてまた必ず終りがあって、それによって完結する。先生にとって大きな人生の区切りであるが、それを通じて先生の仕事は後続の人々によって継承され発展させられるだろう。先生自身においても、その区切りを経てさらに新しい人生の眺めが展開するに違いない。人生の行路には年齢に応じて常に夫々の苦難と喜びがある。学問研究に携わる者にとっての大きな幸せは、その仕事に終りが無いことである。先生の学問研究の道はこれからも継続されるであろうと期待している。

法政大学の発展のために尽くされた先生の永年にわたる絶大の努力に対して、私は文学部の同僚の一人として心から感謝したい。先生には何よりもまず健康を大切にされ、新たな心境でこれからの生活を先生の最も望ましい形で喜ばしく充実して過ごされるよう念願してやまない。

三井嘉都夫教授と私

廣岡治哉

(法政大学経営学部教授)

自由で開放的に学問を楽しめる大学にしたいという只それだけの願いから、三井さんと私は結ばれた。それは昭和56年のことであった。

当時、法政大学は多摩に全学移転すべきかが問われていたが、私は、法政大学の長期的な発展戦略からみて、市ヶ谷の有利な地点を放棄すべきでないという意見を持っていた。日本には、アメリカやイギリスのように、地方で寄宿舎も具えた大学キャンパスを建設できる可能性はなく、むしろヨーロッパ大陸にみられるような都心立地の都市型大学の方が、私学経営上有利であるという考えであった。多摩にカレッジタウンを建設する可能性はないという判断であった。三井先生と私は、この点で一致した。

それと同時に、法政大学が余りにも政治的に動機づけられることに危惧の念を持ち、自由にオープンに意見をたたかわせて、代替的な進路のプラス・マイナスを勘案して、ベターな選択を採用するというシステムのアプローチを、大学運営のためにも採用すべきだという点でも、意見が一致していた。昭和56年に、今井則義教授を総長候補者として推し、ともに理事候補者として立候補したのは、このような動機にかられてであった。その結果、昭和56年から昭和59年まで3年間、法政大学理事として共に働くことになった。三井先生の大学理事としての働きぶりが、誠実そのものであったことは言うまでもない。私は、三井先生が1期3年間でなく、2期6年間続けられればどんなに法政大学のためによかったかもしれないと思っているが、2期続ける条件がなく、ともに1期で引退することに決めたことについては、母校のために粉骨砕身したいと考えておられた三井先生としては残念であったろうと思っている。

三井先生と私が、このような親交を昭和56年に

なって突然結んだわけではない。昭和49年当時、まだ大学紛争が続いていた時に、共に学部長として大学紛争の收拾のために苦勞してきたという経験のなかで、お互いに大学正常化(normalization)のためにつくしたいという気持ちで共通するものを持っていたことを知っていたからである。当時の学部長会議の頻繁さは、記録的なもので、平常時のものとは比べ物にならなかったから、お互い気心をよく分かったのである。

東京六大学野球のテレビ中継放送を見て、三井先生がダッグアウトのなかで、監督とともに座っていらっしゃるのをみて驚いたことがある。後に酒を飲み交わしながら、野球部長としての勤めぶりを伺ったが、部長になった時には野球のことは何も知らず、一から勉強したこと、六大学の試合の時にはいつもベンチに入ることになっているという話を聞いて、全く驚いた。私も長い間、ボート部長をしているが、学会とか研究会、或いは外国出張といった、大事な試合の時にも選手の傍らにいないことが多いのに比べて、三井先生の誠実な部長振りに感心して、その後できるだけスケジュールを調整して、ボート部のために尽くさねばならないと自戒したものである。

三井先生が、自然地理でなく、人文地理の専攻であったならば、交通経済学を専攻する私と、仕事の上でも、もっと関係が深く、議論もたたかわせる機会が多かったことだろうと思う。しかし先生と酒を飲み交わしながら、先生がスウェーデンのウプサラ大学に留学された時のことを話されたり、国際会議での報告の話しをされ、私がイギリスや国際会議の模様を話したりした時には、同じ研究者として共通するものがあり、今でも楽しい思い出として記憶に残っている。

ドナウ, タクラマカン

堀 江 拓 充

(法政大学文学部教授・文学部長)

三井嘉都夫先生が古稀だという。あの御元氣そうな若々しい日常の御様子からは考えられないほどである。停年退職なさるには惜しい。残念だ。大学の制度がそうであれば、私達は先生を見送るしかないが。

先生の学問の性質や業績、大学の理事、野球部部长等についての御苦勞は語るに他に適切な方がいるであろう。退職記念号ということであるにもかかわらず、雑感を綴るしかない。

先生と雑談したうちで、記憶に鮮明な二つほどの御教示を記しておきたい。一つにはドナウ河の川岸の様子についてである。かつて先生は専門の学者の眼で河川流域を詳しく御覧になったらしい。私は6年程前、ウィーンからベダペストまでハイドロフォイルで下った。280キロほどを5時間前後かかったろうか。脈々と流れる大河に身を任せて、オーストリア、ハンガリー、チェコスロヴァキアの国境周辺を旅行者の眼で楽しんだ。高台には古城や教会が点在し、平野には豊かな緑が広がっていた。この中部ヨーロッパ、かつてのハプスブルク帝国、オーストリア・ハンガリー帝国の歴史などを想起しつつ、また埴谷雄高さんが戦中に翻訳されたエミール・レンギルの反ナチの書物『ダニエーヴ』の断片を思い出しつつ船旅を満喫した。ところで、船窓からの眺めで怪訝な思いにとらわれたことが一つあった。つまり、この河には人工的な護岸がないのに目を眩らざるをえなかったのである。洪水に見舞われる国の民として当然の疑問といえるが、川岸には草や楊柳に似た樹木が処々に生え、その向うには肥沃な畑が遙か彼方まで続いていたのである。

どういふ話の続きで、東ヨーロッパやドナウ河の護岸のことに話題が転じたのか全く記憶していない。ただ、私の小学生並の質問に対して、先生は護岸のない所以を（そしてブダペスト近辺に作

られている理由を）降水量や地形、いわばその自然、気候、地理、風土等に於て説明して下さり、立所に納得できたのである。無知は如何ともしがたいもので、まことに有難いことであった。

二つ目は記憶に鮮明というよりも、ついこの間のタクラマカン沙漠の学術調査のことである。先生は、地理学会、史学会、ワンダーフォーゲル部等を率い総隊長として、日中合同の科学探検に乗りだされた。昨夏第一次調査隊の先発として現地に飛ばれた話は、立話や教授会の報告でうかがい、並大抵でない苦勞がひしひしと体得できたのである。

ところで、タクラマカン沙漠自体には私なりの興味が無いわけではなかった。中蘭英助という戦中に中国で生活した作家の作品に『風土の虜囚』や『夜よ、シンバルをうち鳴らせ』がある。特に後者はトルキスタン独立運動がフィクショナルに活写されていた。ムヒイテ將軍のタクラマカン沙漠を突っ切りパミール高原を越えてアフガニスタンに入る逃亡記、タクラマカン沙漠周辺の民族の興亡史など興味つきないものであった。そしてなによりも、あの広大な砂漠の有する独自のイメージがある。映画の『アラビアのローレンス』あるいは『男の争い』などの砂漠の様相は想像力を刺激するものであったが、このタクラマカン沙漠も同様である。書物や映像で見たこの砂漠もいいものであったが、第一次調査隊が新聞等に発表した写真も悪くなかった。

この学術調査は本年が本格的なものであるようで、先生は退職後もあの苛酷きわまりない砂漠へまた足を踏み入れられるという。学問研究の領域や方向がそうした冒険をも敢えてなさしめるというに止まらないだろう。先生の精神の内部に、あの広大にして無辺とも想われる砂漠に駈りやる強靱な力が潜在しているに違いない。この精神の力

がかくまで先生をして若々しい情熱を維持させる根源となっていたとすることができよう。それは同時に、これまでの学問研究、教育、野球部をはじめとする学生指導等に端的に発現されてきたものである。そして、このエネルギーはこれからもまだ燃焼しつづけるはずである。とすれば、停年による退職という事態は、惜しんでも余りあるものだ。先生ばかりでなく、後進の者にとっての不運にほかならないのである。

私たちは止むなく、古稀を越えて尚、かのムヒイテ將軍のいう「タクラマカン沙漠ニソッテ走ル

シルクロードニ近イコンロン山脈ノフモトニ、ムカン中央アジアノ文化サカエタ」地にあえてその身を投げ入れていただき、自然・地理・文化等の精髓を把捉して下さいと申しあげるほかはない。それによってまた新たに私たちを御教示いただきたいものである。砂漠にあがる花火を乱目して待つという段取りである。

先生の学恩に私たち後進の者がお答えできない無力を御海容下さい。ただし、先生は相変らず若々しい精神と情熱で、私たちに有益な示唆を与えて下さいますよう……………。

益々のご活躍を

丸 山 節 夫

(法政大学企画室部長)

先生との出逢いは私が昭和40年頃教務課第二教養部係に在職していた当時、先生がたびたび文学部係に來られたあたりと記憶しています。それから現在まで約26年お付き合いさせて頂いている関係から、私の知る範囲で先生のご活躍の歩みについて記します。

先生は気さくで常に笑顔で対話され、親しみ深い人情味温かい方であります。大半の組織において教員の研究活動・職員の担当する管理運営活動がいわば車の両輪であるとたとえられ、教員と職員の両者の協力が不可欠であります。しかし現実には即していない面も多々ありますが、先生は公私とも自らそれらを実行され、研究活動等にご活躍されております。

ご研究の傍ら昭和49年に硬式野球部長に推挙されました。現在の体育会37部の内で大正6年創部という一番古い歴史を持つ野球部の長として部員の教育・大勢のOBとの係りなど目に見えないご苦労などおありかと思いますが、りっぱに遂行されております。体育会OBの一人としてその労をねぎらいます。

私が、昭和53年の職員の人事異動で体育課に移りましたその頃から、課外体育活動の面で公私にわたり大変お世話になる部署を担当するにいたり

ました。正課教育では十分に果たし得ない人間的なつながりを前提とした課外活動が重視される今日、スポーツ分野の課外体育活動の面で学生なくしては日本のスポーツはないと言われる現在、先生は体育会部長会及び体育審議会委員として体育会発展のため貢献されておられます。一方、昭和56年には大学の理事に就任、同58年には常務理事として大学の運営にたずさわれるなど多様にわたるご活躍ぶりに敬意を表する一人であります。

入学式・卒業式あるいは体育会各部の行事等に出席されれば関係者及び学生諸君らと親しく語り合いされ、常にコミュニケーションを保っておられます。大学で作成した大学紹介映画「青春の知・力・夢」の最後のシーンに卒業式当日、大内山で文学部の卒業生諸君一人一人に笑顔で握手、祝福をしているシーンがあり、とても感銘を受けました。

この度、昨年と本年の二回にわたり、長く“死の世界”として恐れられていた中国西部のタクラマカン沙漠の学術調査のため日中合同調査隊を編成、日本側の総隊長として調査を開始されました。この様なご活躍振りから、定年を迎えられる事に今日まで気がつきませんでした。調査が無事終了され今後益々ご研究に邁進されます事をご祈念申し上げます。

三井嘉都夫先生の思い出

村 上 直

(法政大学文学部教授)

何時もお元気で、大学の内外で活躍されている三井嘉都夫先生が、最早、定年であるといわれても一寸信じる事ができないような気がします。私はかつて三井先生の恩師である多田文男・岡山俊雄・保柳睦美・渡辺光の諸先生に、法政大学で教えをうけたことがあるので、ごく身近な関係にあったのですが、専攻が歴史学であり、他の大学に勤めたりしたので、親しくお話をするようになったのは、昭和46年10月に法政大学文学部の専任の教員になってからです。

その当時の文学部は助手問題の紛争などで大揺れに揺れている最中で、教授会も学内では開かれず、外濠の向うの萩の宮という旅館の二階で行われるという異常な状態でした。そこで、私は新任教員として紹介されましたが、その後に三井先生とお話をするようになったのです。すでに先生は大学院議長の職につかれていたのですが、今、その頃を思い出しても、余り先生が変わっていないように思われるのが不思議でならないのです。それは、今も変わらないタフなお姿が、そのような錯覚に陥らせてしまうのかも知れません。

お逢いしてから20年の歳月が経過しましたが、その間に三井先生とは数多い思い出が残っています。昭和48年に先生は文学部長になれましたが、翌49年に私は教授会主任として補佐することになりました。当時は学生との団交もしばしばあり、忙しい毎日でしたが、その間をぬって生物環境や水質調査などにも出かけられました。しかも、伝統ある法政大学の第10代の野球部長にもなれたのです。そのため、リーグ戦その他の会合の出席など、ますます多忙な日程をこなしていかなければならなかったわけです。こうしたなかで、私も、時々、先生の代理で学部長会議にも出席することがあり、お陰で専任になって3年目にして、早くも学内の事情にかなり通じるようになりました。

た。いずれにせよ、この間に、先生が学部長として教授会や難しい諸事を手際よく処理されていくことを目のあたりにみて、いろいろ学ぶことが多くありました。

その後、先生は大学の理事や常任理事になりましたが、私も通信教育部長ということで、大学の評議員会などで、ご一緒になることがあり、激動を続ける大学の問題の推移を見守り、論ずる機会もありました。このようなことから、三井先生は、今では大学の歩みを表と裏から直接見てこられた数少ない教員の一人であるということができるかも知れません。

三井先生は、法政大学をこよなく愛された方ですが、何といても思い出されるのは、先生の提唱で昭和62年11月に「史学科・地理学科創立五十周年記念事業」が立派に行われたことです。このとき、先生は委員長として陣頭指揮で「記念沿革史編纂」、「教員・卒業生名簿の作成」、「記念講演と祝賀会の開催」、それに「募金集め」など、すべての部分に気を配りながら、半年前から周到な準備を行って進められました。そして赤坂プリンスホテルで盛大な記念講演と祝賀会を開くことができました。まさに、先生の執念のようなものを感じさせられました。勿論、これには多くの協力者や尽力された方を忘れることはできませんが、史学科の一員として何といても先生に深く感謝申し上げる次第です。

三井先生と私の研究分野は、かなり離れているように思っていました。ところが最近になって、意外に近いことに気づきました。実は、私は現在、埼玉県草加市史の編さんに携わっていますが、急に江戸時代の治水政策に関する講演を頼まれ、資料を集めはじめました。そのなかで市長の今井宏氏からいただいた『知水のすすめ』という編著に三井先生との対談の「地形から水害を読

む」という一節が収録されており、非常に参考になりました。つまり、先生の指摘された点を基礎に歴史的展開を行うことができたわけで、改めて地理学と歴史学の結びつきを強く感じる事ができたのです。文献史学が実証性を固めていくには、現在の地形や河川の状況から、総合的に判断し検証していく必要があるわけで、それによって流域の開発や生活圏を明らかにしていくことができるように考えられるのです。

定年退任の時期がせまってきたといわれながら、昨年の8月に三井先生は、厳しい自然環境下にあるタクラマカン沙漠の調査に総隊長として出発されました。その壮行会に私も出席しましたが

大変、印象的でありました。先生自ら「死の海への挑戦」といわれ、挨拶のなかにも、その意気は軒昂にした迫力があつた、定年後の在り方をもまさに予言しているかのように感じられました。先生の年令にやがて近づくようになる私など大いに学ばなければならないという気持ちを強くもちました。そして、9月には無事帰国され、相変らず多忙な日々をお過ごしのようにです。

大学内を足早に忙しそうに歩いておられる三井先生は、20年前と少しも変わらないような気がします。健康に留意され、これから学界その他で、広く活躍されていくことをお祈りする次第です。

三井先生の思い出

大 和 裕 子

(法政大学地理学会副会長・1948年度師卒)

三井嘉都夫先生が平成3年度で法政大学をご退職されること、また70才になられたことのお知らせを受けまして、今更ながら月日の経つのに驚きを感じました。

三井先生を私が存じ上げたのは、昭和21年4月終戦の翌年、すでに私は公立小学校に勤務していましたが、法政大学に入学してからです。

しかし、敗戦によって学校制度もかわり、男女共学の時代になったとはいえ、先輩である三井先生と親しく交流するといった機会は特にありませんでした。ですから先生のご退職に当たって執筆をといわれても、研究の分野も違っていましたし、男子の方々のように先輩、後輩という友人関係もありませんでしたから、とくに思い出といっても何を書いたらよいのかという戸惑いがあります。

しかし、三井先生は、資源科学研究所に勤務していらっしゃる、私も資源研に入江先生をお訪ねしている中に、四国西南地域総合開発等、経済企画庁の委託研究のお手伝いをする機会もあつて、時には雑談をする機会もありました。

それらのことから先生についての印象を思い出

してみますと、先生はいつもエネルギッシュに動かれていましたし、研究生活中心のお話が多かつたように思われます。故多田文男先生や浅井辰郎先生を中心にした資源研の地理研究室では関係のある先生方となごやかな話題で盛り上がったこともありますが、その中での三井先生の笑い声が何となく思い出されてきます。

先生が「水」の研究を通して研究を積み、深められて今日に到られ、地理学の分野での業績を積まれたことは、素晴らしいことで敬服いたしております。それにつけても、フィールドワークで何回か一緒したことがあります。思い出の一つは、確か先生のご郷里が静岡の方ではなかったかと思いますが、富士山麓の湧水池を巡検して、先生の実家辺りまで歩いたことがありました。先生のお話を聞きながらの巡検では、湧水池の水温を測定したり、井戸をのぞいたり、冷水にふれたりしたことが思い出です。先生にとくに尋ねたことはありませんが、先生の生活のご環境からも先生を「水」への探究に走らせた動機になられたのではないかと、勝手な想像をしています。

どのような会話がとりかわされたかは思い出さ

れませんが、多田文男先生と三井先生とを囲んでの雑談もまた楽しいものでした。私などは、男の方の師弟関係の羨しい姿を見せていただいたように思います。

でも、こういう場面はそう度々あるものではなく、真面目な場面での接触が多かったと思います。その後長いことご無沙汰してしまいましたので、先生との出会いもほとんどないままになってしまいました。それが今から5～6年前から法政大学地理学会や、地理・史学教室の記念事業等にかかわる機会があって、三井先生にも年に一回お会いすることになりました。

名実ともに母校の教授として、多くの学生の指導は勿論、教室の運営、研究の深化へと限りない活躍をされている先生に接することができました。それもつかの間、今春はご退職と聞き、残念に思うのが本音でございます。研究室に三井先生がいらっしゃるということで、卒業生、特に古い卒業生にとっては、あの戦災で荒れ果てた校舎の思い出と共に、心のより所となっていたのだと思います。

ご退職になられましても、ご健康に十分ご留意されて、地理学会や同窓の集会でお会いできることをお願いいたしております。

三井嘉都夫先生は私どもの誇り

岡 永 亮八郎

(法政大学地理学会副会長・1950年度師卒、1958年度院修了)

三井先生との出会いは、高等師範部在学中でした。その頃、私も同窓生の期待をになわれて大学助手になられました。また資源科学研究所においても研究にたずさわられ、将来を嘱望された少壮学者でありました。果たせるかな、若くして文学博士になり、陸水学の権威として地理学界に重きをなし、防災関係にも貢献されました。一方、地理学科主任、文学部長、大学常任理事として、多くのお弟子さんを育てるとともに、困難な大学経営にタッチされ、法政大学の発展にも寄与なさいました。三井先生の教え子として、また後輩として誇りに思います。

高等師範部当時、私は時折、資源研にお邪魔しましたが、地理学研究室にもしばしば出入りしました。先生は何時でも私どもをニコニコと迎えられ相手をして下さいました。机上には恩師田中館先生の遺影が置かれ、三井先生に語りかけているようでした。その頃の研究室はさながらサロン(実は溜り場)でした。こうして自然のうちに学問の雰囲気になれることができました。勉強嫌いでとかく挫折しがちであった私が地理学を続けられましたのは、三井先生のお蔭だったと思います。

私は一時地方の高校に勤務し、昭和30年に再び

上京し、地理学科の学部編入をしたのですが、その前に三井先生をお尋ねして、再入学をしたいので合格できるよう宜しくとか、虫のよいお願いをしたように思います。いざ合格発表を見に行ったところ、私の名がない。“ああ！やっぱりだめか、勉強足らんから出直して来いということか”世の中はそんなに甘くない、とつくづく感じたものでした。それでも念のためと思い、三井先生にお電話をしました。頭にきていたので“ひどいじゃありませんか”と悪たれ口をたたいたらしいのでありますが、先生は「そんなはずはない」と言われて、すぐに大学に連絡をとって下さったようで、すぐに自宅に合格通知が届きました。後でわかったのですが、教務係の手違いで掲示がなされなかったとのこと、肝を冷やされましたが、三井先生のお蔭で地理が勉強できるようになりました。

久し振りで先生方の生の、しかも息の通った講義を受けた時の喜びは、今でも忘れることができません。その頃で特に忘れられないことは、三井先生のご指導による法政大学地理学会の発足です。当時の学生には多趣才才で活動的な人もいて、他大学と研究交流もしていたので、時を得、

法政地理の存在を大いに高めたものと思っています。しかし、現在の再会後におけるようなきちっとした学会ではありませんでした。総会などもブツケ本番に近く、うるさ型を議長につけて、早くきり上げて、飲もうや、という雰囲気でした。ちなみにトップは三井先生で、先生方や先輩、後輩の親睦を大いに深めました。

いま一つは「ボルガ」という名のバーのことで、しばしば、三井先生を先頭に学生達が大学してくり出したものでした。当時は歌ごえ華やかなりし頃で、飲み、かつ歌い、喋り、にぎやかでしたし、時にはバーを占領したこともありました。これに味をしめた学生の中には、三井先生の講義の終わるのを待ちぶせて、バーに連れ出すといった不届きな悪もありました。学生の気軽さというのでしょうか、最後に誰が金を払って始末をつけたかもわからず、深夜にご機嫌で帰って行く者もありました。今でこそ三井先生は高給取りでいらっしゃいますが、教授がアルバイトをして生計を立てていた時代ですので、その頃の収入は、失礼な

がらタカが知れたものです。私を含めて学生達が、どれ程ご迷惑をかけたか計り知れません。

大学へ行って、いつも飲んでいような話して不謹慎のようですが、決してそうではありません。その時々で、先生の真剣なきびしいご指導を受け、学生達も真面目に勉強をしていたのです。就職などのお世話をいただき、世に出たものも多いはずで、三井先生はとにかく、やさしいのです。恩師であるわけですが、一面、兄貴のように慕われ甘ったれられるそのお人柄の一端を申し上げたかったのです。

三井嘉都夫先生は、法政地理、いや法政大学の大黒柱として、本学の節目節目でその発展をリードしてこられました。その間の努力とご苦労は想像を絶するものがあつたと推察します。この度の定年退職は、先生を頼りきってきた私どもには、一抹の淋しさを覚えさせます。今日までのご指導に感謝申し上げると共に、これからも法政地理、および同窓の後輩を末永くご指導して下さいようにお願いしたいと思います。

三井先生御苦勞様でした

中 村 宗 敏

(法政大学地理学会副会長・1954年度学卒)

小生、生まれは神楽坂下、今の理科大学の角でした。昭和12年に物理学校が電車通りに出て来たことと、田町3丁目、つまり外濠を挟んで法政大学の真ん前に越して来たのです。遊びは専ら四ツ谷から飯田橋の外濠公園や神楽坂で、法政大学の食堂経営者の息子が2級下にいた関係もあって、大学構内の狭い中学の校庭で遊んだり、カレーライスなどを食べたりしたこともありました。中学校は、当然旧制の法政中学を受験したのですが、当時受験戦争の激烈な年でどの学校も5～10倍の競争率、そして、もう一つ重要なことは口頭試問が最初にあるのですが、それが一般の教師ではなく軍事教官であったことです。小生はたった一言で落ちました。小学校の担任から再三注意を受けていたことですが、「お前は飛行機気

違いだ。それはいいが口頭試問の時には絶対に設計技師になると言っではいけない。航空士官学校に行くと言いなさい」と言われていたのですが、最初の質問が「将来の希望は？」と。小さな運動場の真ん中でしたが、根が正直なものですから「はい、飛行機の設計技師になりたいと思います」と言ったとたん「つぎ」ということで、次の試験教室に入ることも許されませんでした。受験番号555番は今でも絶対に忘れない番号です。これが最初の法政大学との関係でした。

昭和20年3月10日に小生の家は油脂焼夷弾12発の直撃を受け焼けましたが、近くの家が借りられて5月25日の2回目の戦災まで法政大学の前に住み、時計もなかったので大学の時計台を見て過したのです。しかし、4月13日の空襲ではエレクト

トン焼夷弾が落とされ、実に美しく花火を見ているように大学が全焼するのをただただ啞然と見ていました。中学校に落ちたこともあって「いいきみだ」と言う気持ちもちょっとありました。そして、戦後となり疎開先で、学制改革による新制第一回高校卒業となったのですが、当時、父母の家業は花・茶・煎茶道の家元であっても習う人はほんのわずか、とても生活は出来ない状態でした。偶然なことから疎開先の村の小学校の教師となりました。代用教員です。夏休み、冬休み、春休みも正式の免許をとるため、当時、駅弁大学と言われた大学等で免許取得の講義を受け休む暇もありませんでした。しかし、高卒1年後ある国立の地理学科に受験したのですが、父兄の一人から「先生、辞めないで」との声が上がり、その年は大学入学を諦め、免許取得の講義を受けながら教師を続けました。けれども、地理学の勉強をしたいとの希望はもち続けていました。小生の県の国立大学での免許取得講義を受けているうちにその大学の地理学会の設立に参加したのです。でもやはり大学に入学しなければの思いが強くなる反面、国立を受験する英語力も落ちていることもあり、また、地理学科の教授の揃っているところはどこの大学であるかと全国の地理学科の募集要項を見た結果、法政大学地理学科が本邦第一の地理学科であることが解り受験したのでした。ところが代用教員は辞めませんでした。今まで受けて来た教員免許の受講科目の多くが、単位として認められたこともあり殆ど大学の授業は受けず、定期試験だけを受けどうにか単位をとってきたのです。新見付橋のたもとの政文堂の親父さんは小学校時代からの知り合いでしたから、定期試験日になってある先生の教科書を買いたいと言うと、びっくりされ、それでも教科書を買ったことを思い出します。

昭和29年、大学4年生になって初めて毎日大学に通うようになったのですが、そこで初めて三井先生との出会いがあり、確か最初の言葉が「君が中村君ですか」と言う言葉であったかと思えます。三井先生ばかりでなく他の2～3の先生方からもそのようなお言葉を頂き、ただただ恐縮して

いました。小生の学年の人数はわずか7名であったのです。定員は確か40名であったのですから、地理学科史上最低の人数と言うことになるでしょう。ともかく小生は、専門科目は勿論、教養科目の単位の一部も取らなくてはならず、そして、卒業論文も書かねばなりません。確か1年間で80単位近く取ったかと思います。試験は1時間で2科目受験したこともありました。実につらい1年間でありましたが、地理学研究会（当時は地域実態調査会とっていました）の再建や他大学の地理学科の学生との東京都地理学学生懇談会の設立、そして、広島大学での地理学会の時には全国の地理学学生懇談会の組織作りなどに力を尽くしてきましたが、今になって考えますと、毎日のように三井先生と飲む新宿や中野の一杯飲屋でのお酒が、小生の力になっていたのではないかと思います。

小生今でも最も感謝していることは、卒業年次に東京都の高校教師の試験に合格したのですが、当時は今では考えられないほど採用が難しかった年であったことです。その年は結局採用されず、翌年また合格したのですが、三井先生には大変な暑さの中、北区のある中学校の校長室まで御同行頂き、小生のご推薦を熱のある言葉で頂いたことは今でも忘れておりません。有り難うございました。

当時、先に触れた懇談会の東大・教育大・明大・日大・駒大等の学生が同じ教室で採用試験を受けたことも覚えていますが、都立校には採用されず、それが今は殆どの人が大学の教授になっているのですから世の中面白いものです。

卒業証書は頂いたものの就職できず、留年と言うものではありませんが、実質1年間の通学で卒業と言うのはあまりにもおこがましいのではないかと考え、経済学・歴史学等の聴講生のような形で過ごしていたのです。その間、三井先生の渡瀬川の水flowの調査お手伝いで、レンガにペンキで印をつけ、ゴムズックを履き川の中にそれを設置したこともありました。また、先生がお勤めになっていた資源科学研究所で、東大の阪口先生の泥炭の分析などをお手伝いも致しました。その後、三井先生のお口添えで目地出版株式会社に勤務するよ

三井嘉都夫先生の思い出

うになったのです。そこでお世話になったのが北田宏蔵先生でした。大学院の入学でも北田先生には大変お世話になり、「入学金や授業料など私がまけるようにしてやるよ」などといわれましたが、結局はそのようなことは出来ず、同級の女性に全部負担して貰ったのです。三井先生からは「中村さんは（女性からもてて）凄いな」などと冷かされたこともありましたが、三井先生からいろいろな面でとにかくお世話になり、未だ頭がありません。現在、武蔵野女子学院の高校の専任は退職し、週2日、講師として8時間程の授業をしておりますが、法政大学時代に得た多くの先生方の、あるいは先輩や後輩の方々の諸成果をご利用させて頂きながら授業を楽しんでおります。

先生と初めてお会いしたのが確かまだ助手の時であったかと思いますが、法政大学地理学会が出来て数年で何故か落ち込んでしまったのです。とにかく再建だけはしたいと先生とご一緒に努力してきました。現在は大学院紀要も発行されたり、

法政大学地理学会の諸行事が定期的に行われていることを思うと隔世の感があります。しかし、日本の、いや世界の地理学会から見た場合は如何でしょうか。地理教育関係や諸地理学会等において大変すばらしい業績を上げている当学会員が多数いらっしゃることは事実であり、学会誌などでも知られていることですが、一般・教育雑誌等の紙面から見ると、法政関係者の名をあまり見ていないと言う声を聞いたこともあります。如何なものでしょうか。学内に残る方々の幾層倍のご努力をお願い申し上げます。教授・助教授・講師・助手の方々のこれからの発展に、小生微力ながら学外からご助力を致したいと思いますが、学問から離れた者にはどうしようもないのでしょうか。

三井先生のご退職を前にして失礼を顧みず、多少苦言も申し上げましたが、法政大学地理学科を愛する所以ですので、ご容赦ねがいます。

三井先生、大変御苦勞様でした、奥様をお大事に！

三井嘉都夫先生の思い出

桑 原 正 見

(武蔵野女子学院高校・1956年度学卒、1960年度院修了)

私が法政大学に入学したのは朝鮮戦争が真最中である昭和28年4月であります。当時、新宿界隈には戦後の復興をほぼ終えたとはいえ、まだ焼けトタン葺のバラックが散見していたものです。当然の事ながら、わが法政大学にも戦災の跡が色濃く残されていました。地理のいくつかの授業は現在の58年館付近に建てられていた木造校舎で行われていました。

私が三井先生にはじめて接したのはこうした木造校舎で行われていた、一般教養の「地理学」の講義ではなかったかと思います。大学の講義と言えば、例えば、法学のようにご自分で書かれたテキストを講読し、順次解説するといったスタイルが多かった中で、三井先生のそれは前面の壁や側壁まで、ご自分で調査された地域の様々な地図・図等をはり巡らせ、あの張りのある声で、時には

抑揚をつけ、リズムカルに図を示しながら、研究成果の一部をきわめてエネルギーに説いておられて、それが昨日の出来事のように、私の脳裏に鮮やかに焼き付いています。先生のこうした熱意にあふれた講義が、私には大変に新鮮で、親しみのあるものとして、受け止められたことは申すまでもありません。こうした三井先生等の講義を通して地理学が如何に重要な学問であり、応用範囲が広く、私たちの生活と密接に結び付いた楽しくて生きた学問であるかが、つまり、地理学の本質に迫ることが出来るように思えました。また、地理学科を選択して間違っていなかったと改めて思ったものです。その後、先生には卒業論文の作成をはじめ下北半島、鹿屋のシラス台地の地下水調査等に同行させていただき、地理学研究の何たるかを身を持って教えていただきました。

特に、シラス台地の地下水調査では資源科学研究所の嘱託研究生の一員に加えていただき、昭和34年から36年までの3ケ年間におよぶ総合調査を通して、地理学調査、特に地下水調査の基本を学ばせていただきました。

当時、沖縄はまだ日本に復帰していなかったゆえ、鹿児島は日本の最南端であって、最も遠隔の地でもありました。それだけに私には大変興味のある土地で、是非一度訪ねてみたいとかねがね思っていた所の一つでもあり、しかも憧れていた先生とご一緒出来るのですから、天にも登る思いでした。東京を7月下旬午後4時の寝台急行に乗車し、一路鹿児島に向かいましたが、当時の列車は冷房はなく、また、途中から石炭燃料のいわゆる機関車になり、窓をほとんど開けっ放しにしておいたものです。特に日豊線ではトンネルが非常に多く、トンネルに入るとき、窓を締め忘れようものなら顔は勿論の事、下着まで粉塵によって真っ黒になるほどでした。これが汗と一緒にすると始末に負えない状態になり、こんな姿を先生とお互いに顔を見合わせながら苦笑したものです。終点の西鹿児島には翌日の午後5時に着くという25時間にわたる長い汽車の旅でして、今日の汽車の旅では想像もできないほどのです。

鹿児島では鹿児島弁で出迎えられ、シラス地形を初めて見て、芋焼酎を初めて飲み、雨戸・ガラス戸を開けっ放しにした（したがって隣の寝室の

蚊帳が夜通し見えることになる）宿に初めて泊まり、初めて知った特攻隊員の生活と住民との交流話、また終戦後のこの地への米軍が進駐した際の市長、鹿屋駅員、電話交換手、地元住民のといった行動などの秘話などなど驚くことばかりでした。三井先生のこれ等の話を巧みに聞き出す話術に私は感心させられたものです。こうしたことが出来るのも先生の長い現地調査による経験の積み重ねと、健康に恵まれ更には天性的に明るくて快活で、かつ何でも興味を積極的にもつとといった、これこそ地理学徒としての基本的姿勢をお持ちになっているからでしょう。

この頃の先生は利根川の河床調査、続いて下北半島、大隅半島の総合調査、更にわが国の数多くの塩水遡上の調査研究を勢力的に進められていた時期であって、心身共に最も活動的であり充実していた時ではなかったかと思います。こうした時期に、埼玉県地下水調査、千葉県地盤沈下調査をはじめ幾多の調査研究のお手伝いをさせて頂いたことを幸せに感じています。

先生は大学教授としてだけでなく、時には厳しい先輩として、またある時は、優しい兄としての一面をかいま見ることができ、先生の豊かな人間性に触れることができました。

今では、あれから三十有余年になりますが、先生には公私ともにお世話になり、ありがとうございました。

三井先生の特別授業

清水 靖 夫

（立教高校・1957年度学卒、1966年度院修了）

三井先生には、法政へ入学する前から御世話になっていた。元来、私は地理や地図が好きであったが、地理に関する本や、地図を眺めていると、家では勉強とは認めてくれなかった。「地図ばかり見ていないで勉強しなさい……」耳に馴れてしまったフレーズだった。地理や地図では食えないかも知れない。そんな想いもあったかもしれない。古生物、地質、鉱物へ行こうかそんな迷いの

中に2年間が経過した。

高校時代から法政大学地理学会の巡検にはいくつか参加、というより、付いていったと言った方がよいかもしれない。結局自分でやりたかった地理学科に入った。その時、三井先生に「皆が心配していたんですよ、どこを放浪していたんですか」と嬉しいお叱りを受けたのは、つい先頃のような気がする。

同級生16人（これは後に若干の出入りはあったが）比較的まとまりが良かったと思う。また良い先輩にも恵まれ、これも現在まで公私共に続いている。

人数が少ないこともあったが、今よりカリキュラムはおおらかで、随分いろいろな授業を拝聴した。先輩に連れられて地理の研究室を溜り場にしてしまって先生方に迷惑をかけたのも、そんな頃だった。

また夜な夜な三井先生の授業の終わるまでたむろして（と言ってもこの時間は先輩から後輩への授業内容の伝達で、楽しい雑学の時間でもあった）待つことが多かった。先生が「さあ帰ろう」となると、行先は決まって、新宿のボルガであった。生ビールを飲み、パン焼きを頬張りながら、先生から先輩諸兄への話に耳を傾けたものだった。勿論私達へもだが、この話が後年どの位、役に立ったか計り知れない。話題は勿論、人生相談もあったように思うのだが、その中心は地理学界の先生方の人となり、学問の方法論等々…。これによって近寄り難い大御所先生の数々のエピソードは、難しい学会発表や、難解と思われた本も、心ひそかに親しみを持つことで、理解へ一歩も二

歩も近づけたように思う。これは今に到っても見えない財産と思っている。梁山泊とまでいかないまでも、ある時期を画したことは確かであった。さて、ビール代やヤキトリ代をあまり支払った記憶が無い。そのうちに三井先生の家へ焼トリ屋さんからお歳暮が届くようになったという噂が耳に入るようになった。私たちの教育費（飲み代）は、先生のポケットから出ていて、あまりの多さに、異例のお歳暮になったらしい。今思えば丁度御長男が生れて間もない頃で、諸事大変な時期であったにもかかわらず、であった。申し訳ないと思いながら、でもあの大切な時期の、教室では教われない授業は、良き時代の、法政ならではの、三井先生ならではの、他の大学には真似のできない授業であったように思う。カリキュラムや時間に追われない、人間関係の中で育まれた貴重な体験を伝統の中に生かしたいと思う今日この頃である。

三井先生ありがとうございました。教室での授業は聞けなくなっても、まだまだ先生には教えていただかなければならないことが沢山あります。御健康に留意され、若手の尻を大いに叩いていたきたいと存じます。

通信教育と三井先生との出会い

堀 道 也

（1957年度通卒）

1955年（昭和30）法政の通信教育部に地理学科が開講され、200名ほどが3年次へ編入して教室授業に参加した。私は青年師範を卒業して中学校教員7年目であったが、修学年数が同等の農専・工専などの卒業者は、新制大学卒と学歴換算され、私どもは短大卒と格付されている不合理を知り、新制大学卒業の学歴取得をしたいと考えて、法政にしか開講されていない地理学科の通信教育を始めた訳である。6週間の教室授業に2回出席することが、卒業の必須条件であり極めて難関であった。

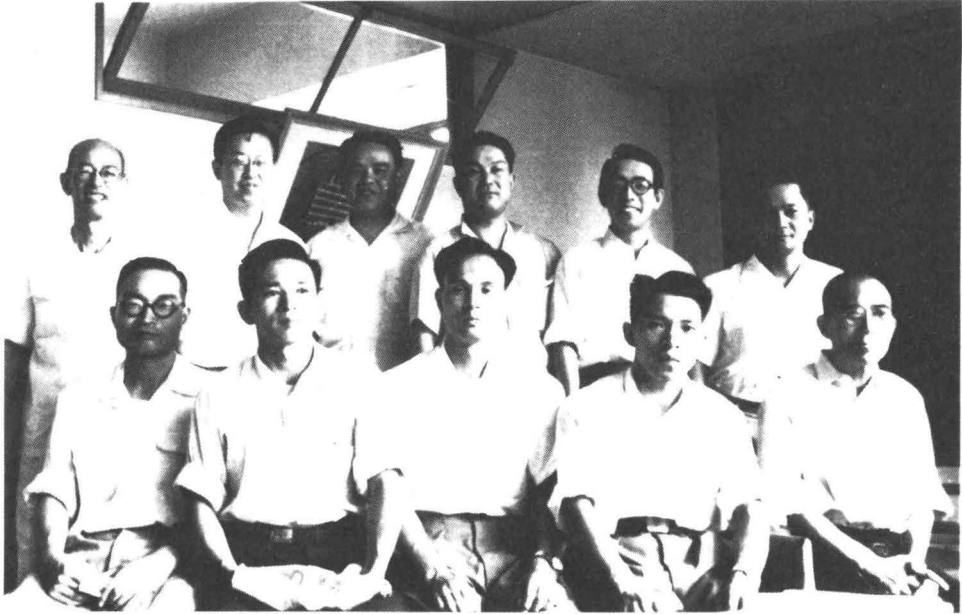
現行の教室授業出席の為の優遇措置はなく、前

年繰越を加算した40日の年次休暇行使だけが、唯一の上京を可能にする手段なのである。年次休暇は校長の承認により成立するので、折合いが悪いと校務に支障があり不承認となる。教室授業の開始が夏休みの2～3日前であったから、生徒を犠牲にし同僚にも余分の負担を強いる問題教員とされたのである。翌年も上京したためか僻地転勤の発令となる。障害を克服しての教室授業出席だから、極力、地理学関連の知識を吸収しようと懸命であった。

三井先生は法政出の新進気鋭の学究で、中肉中背の健康的な顔色に涼やかな眼の、穏やかな物腰

の御仁であった。三井先生が顧問の「地研」に接触でき、東京都水道水源林予備調査行に同行させてもらい、地域の人からの情報収集のしかた、現地における地形図の読み方など、多くの実際的なことを教えてもらうことができた。御専門が自然地理の関係で、渡良瀬大橋付近の毒水の流入・堤防

に囲まれた遊水池などの巡検、中央气象台での高層気象観測用気球の浮揚・気球の追跡などの見学、会津磐梯山の火山地形巡検などで、大変な御指導を頂いた。卒業論文審査の為の面接は勤務の都合で1957年夏になったが、三井先生ほか6名の先生方より、40分も面接を受けた昔が懐かしい。



1957年8月26日卒業面接記念（後列右端・三井先生、前列左より2番目・著者）

カッパエビ先生と私

大 関 保

（大成高校・1958年度学卒、1961年院修了）

三井先生が今年限りで定年退職されるという。つい先頃、我々後輩弟子どもが、先生の還暦祝いかこつけて一杯やろうと画策した会が終わったばかりだと思っていたのに、本当に月日の経つのは早いものである。

私と先生との出会いは、先生が専任講師になられて3年目の最も意気盛んな1956年、自然地理学概論の授業であった。当時のノートを取り出して

みると、日本地誌自然編とでもいうべき内容の講義であったが、湧泉の如く語り出したらとまらない、先生独特のイントネーションの、冗談も入らぬ講義が始まると、拝聴する30名程の学生達は次第にその熱弁に引き付けられていったものである。そして、その授業は必ず時間を超過するのが常であった。当時私は栄養失調気味から眼を悪くし、いつも最前列に座っていたが、昼間の仕事の

疲れから、時として、あの流暢な先生の語り声が子守唄のように心地よく、知らず知らずのうちに頭が下がってゆくこともあった。そのようなとき、頭の上から聞こえる「もったいないねえ大関君は」の先生の声にハッと我にかえり、それから緊張するというようなことが度々あった。そんな日には、先生は見透かしたように、私を数名の学生達と一緒に、あの懐かしい新宿西口のボルガ（今の店ではない、かつての線路際の、カウンターに数人座れば一杯になってしまう小屋といった方がふさわしい店のことである）に連れて行ってくださったものである。いま考えると、そんなときの出費はけっしてバカにはならず、まだ幼い長子のお子様を養育中の奥様を、我々はさぞかし嘆かせていたのではないかと感じている。しかし、あの頃のボルガでの熱っぽい語り合いが、我々の世代の結束と、先生との絆をより強くしていったことは疑う余地のないものと思っている。

余談ではあるが、数年前の日本地理学会の巡検で柿田川に行った折のことである。湧水群を前にして、先生が、ハンドマイク片手に、世話人がやきもきするあいかわらずの時間超過の熱弁で「あいかわらずのカッパエビセンだなあ」（ソノコロハ、ヤメラレナイ・トマラナイデス）と独り言したところ、周囲の大方の先生方の同感を得て命名者の栄？を得た。これにより、三井先生は資源科学研究所時代の「閣下」と併せて二つの別名をもたれるようになったのである。ちなみに「閣下」も資源研の悪童・戸谷君と二人で命名させていただいたものである。その資源研でも先生には大変お世話になった。学生時代からアルバイトをさせていただいたりしていたが、卒業後も国家公務員の給料ではやってゆけず、資源研の無給嘱託研究員にさせていただき、国内の調査にご一緒させてもらったり、製図の仕事を与えていただいた。また、時には他の部署の製図の仕事をお世話願ったりもした。

話は変わるが、私は学部を卒業したなら、地理調査所（現在の国土地理院）になにがなんでも入

りたいという気持ちから地理を学ぶべく法政大学の門をくぐったので、4年次になっても教職課程にはまったく興味も意識もなかった。ちょうど教職課程登録の締め切り日のことである。一、二限の休み時間に仲間と談笑中、三井先生がやって来られて「地理学科に在籍していて教職課程をとらぬ馬鹿がどこにいる。資格というものはとれるときにとっておくものだ。早く学務課に行け」と言われた。その時はすでに登録が締め切られた後であったが、先生が学務課に交渉しておいてくださったのであった。窓口で散々イヤミを言わながら登録を済ませ、教職課程の講義を受けたり、麻布の付属高校定時制で実習したことがその後役立ち、卒業後地理調査所に入れなかったものの国家公務員を4年間勤めた後、教員の世界に入って、もう28年が経った。もしあの時、先生にそむき、学務課の窓口に行かなかったならば、多分今日の自分はまったく違った人生を歩んでいたのではなかったかと思うのである。またまた余談になるが、私の結婚式には先生に司会をお願いしたりもした。いま過去を振り返ってみると、私の人生の岐路にはいつも先生がおられたように思う。私にとって三井先生とは公私ともにお世話になりっぱなしの先生であったし、先生にとっての私は、多分、法政きっての世話のやける「憤慨居士」の悪童であったのではなからうかと思っている。

おわりになってしまったが、私も実行委員のはしくれとして一昨年より動いてきた中国科学院との日中合同科学探検「法政大学タクラマカン沙漠調査隊」も、先生の大変な努力の甲斐もあってやっと軌道に乗り、三井先生を総隊長として7名の予備調査隊を昨年8月22日に中国へ送り出した。三井先生は退職をむかえられるが、今までの経過からして、何としても総隊長職にとどまり、本年からの本調査に全力を傾注していただきたいものと念じている。そして私は今までの御恩返しに、タクラマカン沙漠で先生のお手伝いができれば、と思う今日このごろである。

「いやあ、感激ですなあ！」

漆 原 和 子

(駒沢大学文学部教授・1964年度学卒, 1970年度院修了)

三井先生は、とにかく若くピチピチしていて、飛ぶように歩く先生という印象が強いのです。私は卒業後も幸いなことに今に至るまで学会の度にお目にかかれるのですが、少しおぐしが白くなられたかなという程度で、ちっとも年令を感じさせません。先生に、「並はずれてお元気な秘訣は何ですか」と一度お聞きしましたことがあるのですが、その時、「良く眠るからいいのでしょうね」と言っておられました。

近年何度か、先生と御一緒にカルストに関する国際会議に参加する機会がありました。カルストの国際会議は、とりわけハードなエクスカージョンが続くことが玉にきずなのですが、参加して教えられた私がすでにアゴを出しているのに、なおピンシヤンしておられる先生にはいつも感心させられます。

1986年夏、スペインのマリョルカ島でおこなわれたエクスカージョンで、洞窟の入口に鉄の扉があり、そこには大きな南京錠がかかっている、洞窟に達することができませんでした。ローカルオーガナイザーは急ぎ村まで鍵を持っている人を探しに行ったのですが、みつからなくてもどってきてしまいました。皆があきらめかけたら、チェアマンが鉄の扉の下を素手で掘りはじめたのです。そうこうしているうちにやっと人が抜けられる程の空隙があいたので、皆そこを腹這いになって抜けて、やっと洞窟を見学したことがあります。この時の三井先生は実に素早く、極めて敏速にくぐりぬけました。このエクスカージョンにどういうわけか参加しておられた関口武先生(気候学)は巨大なため、お腹がひっかかって、この空隙にはまったまま抜けられなくなってしまいました。さあ大変だということで皆で手や足を引っぱって、やっと引き出したのですが、その後

聞くとところによると「カルストの会はもう参加しない」と憤慨しておられたそうです。しかし苦勞して入った洞窟のわりには、中はコウモリの糞で一杯で、悪臭をはなっていてがっかりさせられました。また、この洞窟の入口はうっそうとした林で、木から落ちたダニが皆の身体に一面についていて、洞窟から出てほっとしたのもつかの間、お互いに猿のみとりよろしく、見えない背中などのダニのとりあいをしたのです。この時の点検が不十分だったのか、あるいは三井先生はよほどダニに好かれるたちなのか、「風呂でみつけましたよ」と言っておられました。宿でもダニ取りを続けたようです。

このマリョルカ島では、しばしば「いやあ、感激ですなあ！」を連発されておられました。1972年、法政大学地理学教室が文部省の科学研究者で初めて海外調査をした、ユーゴスラビアのアドリア海岸とここがそっくりだとおっしゃるのです。両地域とも中生代の石灰岩地域で、しかもギリシャ、ローマ時代以後の人間活動によって原植生はすっかり失なわれて、裸出カルストが広がり、おまけに両地域とも強い局地風が吹くところなので、植生の回復が悪く、今もって地のはての様な露岩地帯なので、三井先生が「感激」してアドリア海岸を連想したのも不思議ではないのです。先生が「いやあ、感激ですなあ！」と言って目を輝やかせて、私達が教えていただいた二十数年も前と変らぬ表情をされるそのことが、今も若さを保っている元気の源のような気がするのです。何事にもいたく興味を示し、感激をすることこそ、三井先生が今もこんなにお元気でおられる真の秘訣のように思うのですが、いかがでしょう。どうぞ今後もしつまでも「いやあ、感激ですなあ！」を聞かせて下さい。

三井先生と“老化現象”

井 上 奉 生

(法政大学第二教養部教授・1965年度学卒, 1974年度院修了)

三井先生が退職されるということで改めて自分の年齢を意識しました。先生と出会った昭和38年から29年の歳月が流れていたのです。当時の先生の御歳42才, 現在の小生の年齢より6才も若い頃でした。

さて, 大学で地理学科を設けているところでは, 必修単位として「現地研究」という独特の科目があります。以前は「巡検」という言葉を使用していました。すなわち, 地理学を志す学兄全員に課せられているものです。もっとも, この現地を研究対象とする分野は, 地理学の他にも地質学, 生物学, 工学全般あるいは社会学等々おびただしくあるわけですが……。

三井先生も地理学者として当然この例にもれなく, 現地との結びつきは密接でありまして, むしろ他の地理学者とは比較にならないほどその結びつきは強かったといっても過言ではないでしょう。先生の調査研究歴を拝見しましても, 昭和18年から今日までの業績250編余りの大部分は現地調査を中心とした成果です。この期間のほんの一部分である昭和38年から昭和45年の間だけですが, 小生も現地調査の一端をお手伝いしました。この期間は三井先生が兼任研究員をしておられた資源科学研究所(現国立科学博物館と合併)で小生がアルバイトおよび研究助手をしていた期間です。同期同輩, 先輩, 後輩あるいは他大学の研究学徒といった, いわゆる“同じ釜のメシ”を食った若い仲間達が先生の指揮のもとに一糸乱れず? 行動したものです。その対象となった現地は, 米代川, 北上川, 利根川, 九頭竜川, 下北半島の宇曽利湖や田名部川をはじめとする諸河川, 有明海の六角川, 筑後川, 吾妻川, 吉野川, 埼玉県内の諸河川, 伊豆半島の諸河川, 大阪平野の寝屋川, 北海道の大沼, そして東海村の沿岸海域等々, 年に数回ずつの現地入りでした。このように先生は, ひたすら現地調査にあけくれ, 水に関する仕事, すなわち“水商売”を実施

されてきたのです。その後小生は民間のコンサルタントでの仕事を中心となり三井先生とは本当の意味での“水商売”でのお付き合い程度となったのですが, 先生の方は大学を中心に国内外の水に関係するお仕事を精力的に次々とこなされ, それが前にも申し上げた立派な成果となったのです。

この先生の精力的な行動力の根源はいったい何なのでしょう?

老化現象という言葉があります。この意味するところ, 医学的には詳しくわかりませんが, 国語の辞書を引くと「年をとることに起因する一連の現象。臓器や器官の機能減退, 適応力の減退, 記憶力の低下など」となっています。大部分の人間には70才ともなると, この現象があてはまるといわれています。しかし70才で定年退職をむかえる三井先生には果たしてあてはまっているのでしょうか? 現実に平成3年8月~9月に法政大学タクラマカン沙漠学術調査の予備調査で現地入りしています。最初に申しましたように, 地理学を志す人にとって現地調査が必要欠くべからざる条件とはいえ本当に驚いてしまいます。

それでは, 三井先生は日常生活において養生訓のごとく摂生にこれ努めているのでしょうか? これについても疑問の余地は残ります。というのは, 先生とお付き合いをしている頃には研究あるいは現地調査が終われば校歌放吟, 毎晩のごとくアルコールで身体中を“消毒”していた記憶があります。現在では小生の方に老化現象の状態がちらちらしはじめ, “消毒”の方はいくらか遠慮していますが, 聞くとところによれば, 先生は若い学生さん達と今でも深夜まで付き合っておられるとのことで, 年齢とともに徐々に, “若化現象”を来しているのではないかと驚いています。

ただ, 先生は若い頃から現在まで8時間の睡眠を必ずとるそうです。ここいらへんに精力の源が

あるのかも知れません。しかし大半の人間はより多く睡眠をとったとしても先生のように精力的に活動ができるとは限りません。その他に何らかの秘訣があるのかも知れません。この“若化現象”を維持する秘訣を、近々、伝授されたいと思って

います。

とにかく、三井先生は老化現象という言葉とは無縁なのです。今後も益々御元気で更なる御活躍をされますように心からお祈りしています。

三井先生との出会い

小 間 経 昭

(糸魚川市立糸魚川中学校・1965年度学卒)

先生との出会いは昭和38年、学部2年生の時であったと覚えています。

取り壊されて、今はもうなくなってしまいましたが、「六角校舎」の、あの薄暗く埃っぽい教室で、先生は確か日本地誌の講座を担当されていました。小柄ながら、エネルギーに満ちた話法で講義をされる姿に、親しみを感じていました。

秋も深まり、涼しさから寒さを感じるようになったある日、講義を終えて教壇を降りられた先生が、帰りの支度をしている私たち学生に、利根川の水質調査の手伝いを頼まれました。先生の人柄に好感をいだいていた私は、これを二つ返事で引き受け、その日の夕方に現地へと向かったのを覚えております。

これがきっかけで現地調査や資料収集、データの処理などの、先生の仕事のお手伝いをするようになったのですが、不出来な私のことですから、先生の手を煩わせたり、頭を悩ませたりした事が相当あったであろうと、今になって反省をしております。

私の父は酒をまったく飲めず、酒席への参加を極端に嫌っていました。子どもには割合厳しい方でしたから、私はこの年になるまで酒というものには縁のない、まったくの箱入り息子に育っておりました。

ご存じの通り先生は酒豪中の酒豪であられました。調査や資料整理が一段落するころ、あの大きな目をやや細めにされて、「君たち、今日は一緒にどうだね?」と、よく声をかけて下さいました。そして先生の馴染の店だったでしょうか、新宿駅

西口の、確か「ボルガ」という居酒屋へ、たびたび連れて行ってもらったのを覚えております。

そのころ大学院や学部の中に、割り合い親しくさせてもらえる先輩諸氏が何人かおられました。それも先生の息のかかった方々ばかりで、こと酒に関しては相当に訓練を積まれた立派な方ばかりでした。先生を含め、入れ替わり立ち替わりに誘われて、3日と空けずの朝帰りがあったり、「人間奈良漬」になったような事もありました。おかげさまで私の晩酌の腕が上がったことは、特筆しなくともおわかりいただけると思います。

その頃、私たちは新宿百人町の資源科学研究所で、先生の仕事のお手伝いをしておりました。元陸軍研究所のすすけた建物と、前庭のみごとな桜とのコントラストが今でも私の記憶に鮮明に残っております。

研究所での私達の仕事は資料整理などが主で、割合責任の軽いものばかりでした。ですから適当に怠けたりして、半ば遊び気分で行き通っていったように思います。授業が早目に終わった日などは、教室を出たその足で研究所へ行き、研究室の中はたまり場なムードさえありました。

夕方になると、コンクリートの廊下で先生の皮鞋の音が聞こえてきます。先生の歩き方には独特のリズムがあるのですぐに分かります。あの薄暗い廊下の天井や壁に、こだまのように響いて研究室の中にも聞こえて来るのです。誰がいうともなく「来たぞ!」の声で全員が机に向かい、あたかも真面目に仕事をしていたかのようにふるまったりしました。

「やあ、どうも」の声とともに、先生は研究室の分厚く重たい大きなドアを後ろ手に閉めながら「元気でやっていたかね？ウフフ！」と、いたずらっぽく声をかけられ、私たちが何をやっていたか全部お見通しのようでした。

いたずら盛りの餓鬼のような、親子ほども年が違ふ私たちと、先生は上手に話を合わせておられました。先生の心の広さとゆとりを感じたものです。そのような先生の人柄がまた一段と魅力的でありました。

先生はよく調査に出かけられました。日本国中の主要な河川は、ほとんど足を踏み入れられたのではないかと思います。私が同行させていただいた調査の主なものだけでも、利根川、渡良瀬川、名栗川（埼玉県）、九頭竜川、富士川、下北半島、六角川（福岡県）……（あとは忘れました）などになります。調査は大体3日くらいから長くなると10日以上になります。したがって、日帰り

や一泊程度の簡単な調査を含めると、もっと数多かったことでしょう。

このような調査に出かけた時が、研究室や教室でお会いする先生より、もっと人間味を感じることのできる時でした。「同じ釜の飯を食う」といわれる諺のように、調査中一緒に食べ、一緒に寝起きを通して、先生の人間としての温かさ、大きさにいえば、自分の父親のような匂いを感じたときがありました。

学部を卒業して地方に赴任し、先生の匂いは嗅げなくなりましたが、風の便りに先生のご活躍の様子を見聞きする時、懐かしい思い出がほとぼしり出てきます。

先生とは学生時代のほんの短い期間しか一緒にできなかったのですが、私にとってはものすごく密度の高い濃縮された時間でした。三井先生との出会いは、私の生き方を大きく変えたものであったと思っています。

資源研での出会いから30年

長 沼 信 夫

（駒沢大学文学部教授・1968年度院修了）

日本地理学会秋季大会が1962年10月下旬に香川大学で開催された際、私は第一会場で水に関する研究発表のいくつかを聞く機会があった。その研究発表のひとつに、「三井嘉都夫（資源研）：東京低地主要河川の水質汚濁に関する研究Ⅰ」があった。発表内容は1960年から資源科学研究所で実施している江戸川・隅田川・中川などの東京低地を流れる諸河川を対象に、多くの水質汚濁指標項目を用いて、毎月調査してきた研究成果の報告であった。

私はこうした諸河川に囲まれた下町低地で生まれ、育ってきたことから、この研究発表内容は大変身近に感じ、興味深く捉えることができた。学会から帰京後、私は学部時代の指導教授井口正男（現福山大学）先生に仲介をお願いして、新宿区百人町の資源科学研究所へ三井嘉都夫先生を訪問した。そして先生に訪問目的などを告げ、資源研

で水に関する勉強をさせていただく許可を懇願した。先生は私の主旨に理解を示し、快く内諾してくださった。この頃、先生の陸水学研究室には助手として戸谷康義氏が在職しており、また研究室には夕方ともなると、桑原正見（武蔵野女子学院高）・大関保（大成高）両氏などの法政大学卒業生ならびに在校生諸氏が集まり、調査の打ち合わせや資料整理などの作業を行っていた。

当時の資源研は1961年に財団法人となり、地域開発、災害防除、自然保護などの地域性に関する研究や、水質汚濁に関する研究の委託調査を中心に進められていた。三井先生が主に後者の河川に関する調査を中心に研究されていた関係で、多摩川、江戸川、隅田川などの東京の諸河川や利根川河口堰建設に伴う環境変化に関する調査などの手伝いをする機会を得た。さらに埼玉県企画部の委託で、県平野部全域の地下水調査が実施された

が、この際にも協力させていただいた。また研究室においては、調査資料などの整理や図化の作業についても従事し、種々の点で多くの方々から教えを受けた。なかでも三井・桑原両先生からは卒業論文作成に関して貴重な教示を賜った。こうして資源研で学んだことが私の現在に至る研究の基礎となっている。

その後、私は法政大学大学院へ進学する機会に恵まれ、三井先生には博士過程で指導教授をお願いした。1970年から先生が研究代表者となった文部省科学研究費補助金「特定研究・水資源」では、分担者の一人として調査・研究をする機会を与えられ、さらに別の科研費補助金による研究においては北海道東部地域、岩木川流域、阿賀野川流域などで一緒に調査する機会を得た。また、科学技術庁資源調査会の土地資源部会・保全小委員会では、多田文男先生の他界後、三井先生が委員長に任につき、「低地帯の都市化と土地利用合

理化に関する調査」報告を精力的に取りまとめられた。ともすれば労多く益少ないお仕事を、情熱をもってなされたことは、私たちの模範となることと思う。その成果は1980年12月に科学技術庁資源調査会資料第83号として刊行された。

三井先生とはここ10年位学会会場や座談会の席上などでお会いする程度であったが、1991年10月下旬の日本地下水学会秋季大会（於宮古島）では、久しぶりにゆっくり歓談する機会に恵まれた。その折、先生は30年前に資源研ではじめてお会いした頃と少しも変わらず、お元気で、研究心旺盛であった。1992年秋には中国タクラマカン沙漠調査隊の総隊長として、再度砂漠地帯を踏査される。古稀をむかえた隊長が世界第二の規模をもつタクラマカン沙漠を踏査するのは、中国本土ではじめての快挙と聞く。益々お元気で、調査の成功とともに多くの学術的成果があげられるよう心から期待したい。

四万十川と三井先生と私

山 本 恒 男

（高知県立中村養護学校・1968年度通卒）

私が三井先生に御教示を仰ぐようになりましたのは、今から20数年前、通信教育部地理学科へ三回生として編入学してからです。

在学中は、地誌学や地誌学演習、巡検、卒論指導など、随分ご指導をいただきました。とくに伊豆、箱根方面での巡検は、三井、市瀬のお二人の先生のご指導のもと、初めて見る狩野川や断層地形、火山地形、地質など、また、そのような自然への人々の働きかけなど分かりやすい説明で楽しい巡検となりました。この巡検が終わると、いよいよ卒論作成にとりかかりますが、私は、この頃、未だテーマが絞れず迷っておりました。ちょうどその頃、先生の講義（地誌学か地誌学演習だったか確かではありませんが）で、「渡良瀬川のA点でレンガを投入し、1年後、2年後にどの地点まで流されているかを継続的に調査することにより、川の性格を把握することができる」という内容の講義を受けてい

ました。その講義から、私も四万十川について、一つ卒論にまとめてみようと思い、「四万十川下流域の地形と洪水について」と言うテーマで提出し、三井先生のご指導を受けることになりました。先生から、いろいろと注意すべき点やデータの集め方、分析の仕方、まとめ方など懇切なご指導をしていただき、どうにか卒論らしきものを書き上げることができました。

そして、いよいよ面接試問を受けることになり、受験生は二組に分かれ、それぞれ4名の先生によって試問が行われるので、卒論の要旨を3分以内で説明できるようまとめておくことの指示を受けました。

いよいよ私の番になった時、隣の組が全部終了したため、そちらの組の先生方も合流し、8名の先生に取り囲まれる結果になりました。4名の先生からの質問に答えるだけでも大変なのに、その倍

の8名の先生が、そう思っただけで、もう上ってしまっていて、ボーッとなっていました。その時、三井先生がそっと近寄って「私が君の正面に座るので、私をはっきり見えたら、一つ深呼吸をしてから始めなさい。心配する程のことはないから」と耳元で囁いてくれました。そのことばで気持ちが落ち着き、どうにか無事面接が終わりました。落ち着きと勇気を与えて下さった先生のことばは今でもはっきり覚えております。

その夜は関係の先生方の参加をいただき、私学会館で、ささやかな祝賀パーティーを催していただきました。その席で、先生が「私はまだ四万十川を見ていないので、これを機会に是非一度は見たい」と言っておられました。その後は年賀状の交換だけで、賀状には毎年のごとく「近いうちにお伺いしたい」と書かれておりましたが、大学での講義や研究活動でお忙しく、来ていただけるチャンスに恵まれないまま、20年位がまたたく間に過ぎてしまっていました。

ところが、昭和61年7月の或る日、先生から「四万十川調査について、文部省の研究助成が決まったのでよろしく」と言う手紙をいただきました。それで私は約束の時間に駅へお迎えに行きましたが、その夜は運悪く列車の遅れでお会いすることできずにホテルへ行き、以前、卒論に加筆して少し書き直した小冊子を託して帰りました。翌朝ホテルを訪れ、約20年のブランクはありましたが、先生も、私もすぐ判り、再会を喜び合いました。前夜は列車の遅れと長旅でお疲れになっておられたにもかかわらず、フロントに託していた小冊子に目を通され、大変喜んでいただけた事を嬉しく思いました。その日から先生方は資料収集のため建設省中村工事事務所や中村周辺での予備調査を始め、私も勤

務の合間を縫っては、お供をさせていただきました。

そして、時には充電のため、足摺岬や大堂海岸の方へドライブに出かけたりもしました。足摺岬では堆積岩と花岡岩の不整合、南海地震で1mも隆起した唐船島、大堂海岸では白亜の大断崖や海中より屹立した観音岩、これを見られた時の第一声「おお 立派だなあ」と感無量でじっと見つめ、にんまりされた先生。そして青い海に浮かぶ島々、車窓や展望台などから見た景観や地形、地質などについて話が弾むにつれ、在学中の楽しかった巡検を思い出し、何か大変懐かしく思いました。

この一連の調査で、ある年は窪川で、また宇和島で落ち合い、本流および主な支流等ほとんど踏破され、その間、佐藤先生、小寺助手、大石君や多くの学生に囲まれ、南国の強い日差しのもと、お年を感じさせないバイタリティー、研究に対する厳しい姿勢の中にジョークやウイットに富んだ会話、いつも絶やさない笑顔の中で、楽しく調査研究を進めておられる姿は、20数年前、私たちが学んでいた頃と同じだなあと思いました。ここに先生の持つ人を引きつける飾らない温かさ、学問に対する情熱と厳しさを感じ、これが先生の若さの秘訣かなと思いました。この四万十川の調査につきましては、先生の永年にわたる夢でありました「四万十川の河床変動」に関する研究で、しかも、5年に及ぶ長期の調査研究で、立派な成果を上げられ、先生もさぞご満足なされた事とお喜び申し上げます。

この3月には職を退かれるということですが、益々お元気でご活躍されますよう。また、洪水の時の四万十川も見においで下さい。そして、過日、お会いしました折、話されていました屋久島や台湾の河川の調査旅行には是非お供させていただきますと思っています。

三井先生の思い出

土 田 邦 男

(千葉県立千城台高校・1969年度学卒、1972年度院修了)

三井先生が退職なさるとお聞きし、20数年前の元気はつらつとした姿を思い浮かべ、時の流れを

しみじみとかみしめております。

先生に初めてお会いしたのは、大学2年の頃

だったかと思います。当時、地形学・気候学・経済地理等を受講していたのですが、自然地理の分野に進もうか、人文地理の分野に進もうか迷っておりました。その時先生の陸水学の講義を受け（当時は地下水について講義されておられました）、陸水は面白いものだと感じ、卒業論文はこれでいこうと決めたものでした。そうになると、もっと勉強しなければなりませんし、調査のための技術的な分野も修得しなければなりません。それには「巡検」ということになります。巡検は、先生以外では市瀬先生、津屋先生、吉野先生の巡検に参加させて頂き、基礎的な知識の必要性やデータの分析等を勉強させて頂きましたが、なんといっても出色であったのは三井先生の巡検でした。先生の巡検は、当時、富山県の庄川扇状地における地下水調査だったのですが、この時、調査方法はもちろんのこと、人間関係をも含んだ教えを受けたのではないだろうかと思われまします。それは、地下水調査の場合、各家を回って聞き取り調査を行い、実際に測定しなければならぬわけですが、うまく話をしないと井戸を調べさせてくれません。そこから、人との接し方など様々教えられた気がします。また、巡検の最終日の夜は、いつも決って打ち上げが行われ、酒の飲み方も知らない当時のこと、羽目をはずしてドンチャン騒ぎとなるのが常でした。そのような時、先生は何時も温かい目で学生であった私どもを見つめて下さっておられました。ですから大学院の3年間を含め、先生に研究以外でおしかりを受けたという経験を、幸か不幸か持っておりません。

また、学生時代の3・4年生頃は、学生運動の華やかなりし頃で、キャンパスがロックアウトさ

れ、入れない状態となっておりました。当然講義は休講となるわけですが、先生が大学近くの喫茶店でビールを飲みながら話を聞いて下さったことを覚えております。喫茶店でビールを飲むという奇妙な取り合わせにびっくりしましたが、それよりも喫茶店でコーヒーという既成の概念にとらわれない自由な思考をされる方、という印象を強く持ったものでした。

卒業論文は、地元新潟県の砂丘地における地下水の賦存状態を調べることにになりました。4年生の夏などは、毎日のように電導度計等を担いで出かけたのですが、夏の炎天下のもと、途中でいやになりそうになってしまう私に、先生は調査地点の選び方、研究の方向等いろいろとアドバイスして下さい、勇気づけられ、また資源科学研究所で水質分析の方法等も教えていただき、なんとかまとめることができたと思っております。

大学院では河床変動の調査を中心として勉強させていただきました。学部の時とは違って、知識の不足・勉強不足をよく指摘され、学問研究の厳しさを痛感させていただきました。また、先生の御自宅にもおじゃまさせていただき、いろいろと御迷惑をおかけしてしまいました。

先生は、学生の思いをよく理解され、また、大変なバイタリティー・行動力を持たれておられました。卒業して20余年、なかなか先生にお会いするチャンスがないのですが、今でもきっと当時のあのバイタリティーを持って講義されておられることと思います。私自身、高校の教員として自立できたのも先生の御指導の賜と感謝いたしております。どうかいつまでもお元気でお過ごしいただきたいと思っております。

三井先生

船 山 幸 夫

（秋田県立秋田東高校・1970年度学卒）

「1969年5月27日(火)午後1時、新館74番教室で、陸水学（当日の予定は、河川の流域の形状と河川水の涵養について）の講義をしようとして教

室のドアの前に立つと、ドアには黒マジックで『三井学部長代行大衆団交より逃亡す』と書いてある。当時、池島文学部長が病床にあったので連

日連夜の学部長会議に出席したり、自治会の委員からは夜中の1～2時頃でも再三自治会の要求、団交問題で電話を受けていた時だけに私にはショッキングだった。しかし教室は封鎖されているわけではないから、意を強くしてドアを開け教壇に向かった。しかし、黒板には達筆であるがドアと同じ事が一杯に書かれてあった。無言の時間を経て、消し、講義に入った。教室はほぼ満席で三年生が多かっただけに今回卒業される諸氏とは対面していた。卒論面接やゼミナールでそれぞれの氏名と顔が明確になった今となっては思い出も深い。……」(三井嘉都夫「思い出」卒業記念文集1971年3月より一部抜粋)

この講義に私も居たような気はするが今となっては定かではない。当時の時代の状況は全国の大学闘争のシンボルであった東大安田磐の陥落以降大学立法を含む弾圧体制の強化のなかで、大学解体論を唱えた全共闘主流は見通しを失い、自己崩壊へ向かっていた時期であった。当時学部長代行であった先生の心労は大変であったろうと思う。当時、私たちが組織していた地理学科闘争委員会の主流は、全共闘主流の解体論の運動とは異なる位置付で全共闘に参加し、原則的な運動を組織していたこともあり、直接的な交渉、討論の相手は教室主任の今は亡くなられた大貫先生であり、政治的場面で対峙するシーンはなかったように思う。

情況が私たちを求め、また私たちが情況を創った時代であったとはいえ、大学の4年間で半分はデモ、スト、ロックアウトの時代であったから、学問研究なんて無縁なまま卒業ということになりかねなかった。たまたま高校時代から関心をもっていた水の問題を卒論のテーマに選ぶこととなり、三井先生の指導を受けることになった。幸い、一級上の秋田出身の佐藤典人さん(現教授)にもお世話になり、どうにかこうにか卒論をまとめることができた。この過程で資源科学研究所などへも出入りさせていただき、学術研究の雰囲気を知ることができたことは、私にとってとても思い出深いことであり、そしてとても有意義であった。

なにかをやり残したまま卒業してしまったという思いがあったとはいえ、卒業後も文部省の奨励研究の推薦文を書いてもらい、佐藤典人さんはじめ秋田出身のメンバーたちと数年に渡る男鹿半島の目潟の研究をそれなりにやれたのは、三井先生との関わりのなかで、学術研究の雰囲気を感じ得たからだろうと思い、とても感謝している。

数年前の法政大学地理学会の懇親会で久し振りにお目にかかったが、あの小さな体で(失礼)相変わらずのエネルギーな行動力はいささかの变化もなかったように感じた。定年退職とのことであるが、今後も大いに活躍してほしいし、またそれが先生には可能であると確信している。

三井先生と天文研究会

佐藤正史

(秋田県立由利高校・1971年度学卒)

私が三井先生を知るようになったのは、「天文研究会」を創立するときであった。当時、大学には天文関係のサークルは一切なく、もし天文をやろうとすれば、法政地学会に入会し関東ロームの片手間に天文をやる程度であった。そのため天文の好きな連中が数名集まって「天文研究会」を創設することになり、学生課へ出かけた。その時、常勤の教員が顧問・責任者として必要なことがわ

かった。当時、大学には宇宙文明論で知られていたA教授がいたのでお願いに行った。教授は我々の予想に反して快諾してくれたが、創設の書類へは「後日、捺印して送付する」とのことであった。青春の貴重な時間を我々は1カ月も待った。しかし、返事はなかった。教授に会いに出かけたが2回も門前払いを喰わされた。考えてみれば、激動の1970年に得体の知れない薄汚れた学生が、

得体の知れないサークルを創ろうとしていたのだから教授にとってもやっかいなことであったかも知れない。サークルの創立は、責任者の問題で宙に浮いてしまった。

そのころ、あまり意識はしてはいなかったが、私が受講していた「海洋陸水学」の教授が、時間にすれば5分間位ではあったが、惑星の話をした。普段は、たいして講義を聞いていない私だったが、その話は感動的なものであった。そして、「水商売」のその教授の多彩な知識に感服した。その方こそ三井教授であった。数名の仲間にその話をしてサークルのことを頼むことになった。当時の仲間は半数以上が地理学科生ではあったけれども、専門外の教授であるため断られても仕方がないと思っていた。先生はにこにこしていたが、やはり「天文学はどうも」とおっしゃる。我々が用意していた殺し文句は「地理学科の学生が多く、みんな困っている」ということであったが、それを聞いた先生は、数秒考えてから、「あまり力にはなれないかも知れないが、君達が困っているのだったら」と了承してくれた。我々が半狂乱になって喜んだのは、言うまでもない。

こうして、我々の「天文研究会」は船出した。基本的に、三井先生にはあまり迷惑をかけないということで、サークル活動での関わりはあまり多くなく、各種コンパに招待する程度ではあったが、それでも講義の終了したときなどに、時々「サークルはうまくいっているか」などと聞かれたものだった。コンパへのご招待にしても、貧乏学生が考えがちな、先生の懐をあてにしたことも多かったように思う。それでも先生に喜んでもらうために、わざわざ数名がわざとらしく学生服を着て、軍歌などを歌いまくってコンパを盛り上げたこともあった。長髪に学生服は不気味であったが、先生は赤い顔を光らせながら子供のように大笑いをしたものだった。

そのようなサークルの関係もあって、今まではあまり熱心でなかった「海洋陸水学」は、私にとって欠席は許されずノートを取りながら真面目

に参加するという講義になった。しかし、そのため私は新たに「陸水」というものに興味をもつようになったのである。私の卒業論文や現地研究の対象は「陸水」一本になった。

砺波平野での現地研究は、散村を十分散策したことや、酒屋から三井先生の名前で酒をもらったことなどたくさん思い出があるが、いちばん印象に残っているのは芦原温泉のことである。現地研究の終了後、佐藤典人院生（現教授）らと共に、三井先生に芦原温泉での打ち上げに連れて行ってもらった。貧乏学生にとっては目が飛び出るような豪華な旅館に泊まって食事をした。食後は勧められるまま、芦原大太鼓を見に行った。三井先生は大喜びで、童顔をはち切れそうにして笑いまくる、佐藤院生にたしなめられたり……で天国のような一夜であった。

卒業論文の指導も、ていねいにしていただいた。当時、武蔵野女子学院・高等部の桑原先生を紹介していただいたり、多くの先生方と知り合うことができた。佐藤典人教授には、いまだに教えを受けている。豊玉中の先生の自宅にも何度かお邪魔した。先生のご息が高校生の時で、「バイクを欲しがっているが、どうしたものか」などと逆に相談されたこともあった。ちなみに、私の答は「買ってあげて、正しい乗り方をするよう約束させたほうがいい」であったが、それが正解であったかどうかは未だにわからない。先生の家から帰るとき、長い長い歩行者用信号を待ちながら、「不毛であると言われていた大学生活で、いい先生と知り合えた幸運」を、しみじみとかみしめたものだった。

2年前、「天文研究会」創立20周年記念式典が開催された。かつての仲間達が老けて、20年の歳月を感じさせている中で、三井先生だけは20年前と同じで若々しく、童顔をほころばせながら笑っていた。おそらく、私が三井先生を知り得た20年間だけでも、地理学科・天文研究会の学生など、先生が接した多くの学生・人々に、やすらぎを与えてきた笑顔であったろう。

忘れ得ぬ日々

宮垣津 繁

(法政大学通信教育部指導講師・1972年度学卒、1981年度院修了)

三井先生の数々の業績はもとより、名物教授ぶり、外国通、温厚でスケールの大きい人柄、酒豪など、先生について思いつくままあげていったら、きりがないほどである。そのような先生について、字数の許す限り、いくつかエピソード的に書かせて頂きたいと思う。

さて、先生との初めての出会いはいつだったかという、私が学部で2年生で、先生の講義を受けた時だったと記憶している(昭和45年)。その当時は例の「大学紛争」の嵐が吹き荒れていた頃で、私が1・2年生の時は、大学封鎖、休講の連続でまともに授業を受けたことはあまりなかったような状態であった。確かその当時、地理学科の専門科目の授業で使われていた「新館」と称する、ツタのからまった古めかしい建物の中の狭い教室で『地学実験』の講義があり、水質の測定法について話されていたのを今でも覚えている。しかし、その先生とその後、公私にわたってかくもお世話になろうとは当時は思ってもみなかった。大学3・4年生の頃は、「大学紛争」も時々はくすぶり返してはいたものの、何とかまともに授業を受けられるようになった。先生の担当されていた『海洋陸水学』と『自然地理学演習』を履修して、また『地理巡検』を通して「陸水」について大きな関心をもつようになった。先生の講義の例の“名調子”は、まさに長年の調査研究によって培われた、ゆるぎのない自信から自然と生まれ出てきたものであると思う。軽快なテンポの授業は大変わかりやすく、そして時々、冗談が入るので90分授業も一度たりとも退屈することはなかった。

河川の洪水についての講義の中で、温泉に入っていた人達が風呂桶と一緒に洪水に押し流されていった話などは、まるでその場にちょうど居合わせたかのような描写ぶりで、印象に残っている授

業のひとつである。

巡検の時のコンパでは、酔うことを知らないかのような飲みっぷりに、“酒豪”のウワサはやはり本当であったかと改めて納得させられたものである。酔うほどに出てくる先生の歌といえ、知る人ぞ知る十八番の「船頭小唄」で、目を閉じて渋い声で歌われていた姿が鮮やかに目に浮かんでくる。とにかく、酔えば酔うほどに次々とバラエティーに富んだ話が飛び出してきて、夜遅くまで先生を囲んで飲んだものである。

卒論は先生の御指導を受けてまとめたが、何とか仕上げて、年の瀬に友人と2人で先生のお宅に押しかけて行き、拙い研究論文を読んで頂いた。年の瀬は何かとあわただしい時期であるにもかかわらず、ていねいに御指導して下さいたことを今でも心より感謝している。その時に、奥様の入れて下さった紅茶の温もりとケーキの味を昨日のように覚えている。

その後、大学院でも先生の御指導を仰いで研究を続けたが、なにぶんできの悪い院生で、時には叱られ、時には励まされと、先生には御面倒をかけてばかりいたように思う。院生の時には何回も調査や巡検に同行させて頂き、現地調査はいかにして行うべきかを、身をもって体験できたのは実に幸いなことであった。先生は常々、研究というものには文献ばかりに頼らず、自分の足で実際に現地を歩いて調査し、データを作ることが大切だとおっしゃられていたが、まさに“至言”であると感じている。巡検の時の先生の歩く速さが、なぜか今でも印象に強く残っている。小柄な先生ではあるが、そのエネルギーギッシュな行動には圧倒されたものである。

そして現在、そのエネルギーギッシュな行動力は、かの「タクラマカン沙漠」へと向けられており、「法政大学タクラマカン沙漠調査隊」の総隊長と

して御尽力されている。「第一次調査」を無事終えられて帰国後、ハガキを下されたが、日本のような水に恵まれた自然環境からはほど遠く、「口の中は乾きに乾いて、喋ると入れ歯が飛んでしまう」と、その乾燥のすさまじさが書かれてあった。そのような乾燥地域だけに、今後の調査の御

無事と大きな成果をあげられんことを心より御祈念したい。

最後に、先生の益々の御健勝と御活躍をお祈りして、ペンを置かせて頂きたいと思う。

「先生、長い間たいへん御苦勞様でした」

人間的地理学者・三井嘉都夫先生に学んで

池 英 助

(国学院大学久我山高校・1975年度学卒、1982年度院修了)

記憶の片隅にあった御退職は、後2～3年ほど先のことでした。しかし、今年に入って武蔵野女子学院の桑原正見先生にお会いしたとき、「三井先生は今年度いっぱい退職ですよ」との報告を承り、私の記憶の誤りを認識するとともに、一抹の寂しさや無常の思いを感じざるを得ませんでした。法政大学が身の寄り所だとすれば、三井先生は心の寄り所であります。何か、自分自身の青年期が名実ともに去ってしまったような複雑な思いが致します。

思い返しますと、昭和47年に始まる私の学部時代、法政大学地理学教室は鴨澤巖、大貫俊、小川徹、吉野正敏、渡辺一夫、市瀬由自の諸先生、それに三井嘉都夫先生というまさに多士済々の教授陣でした。また非常勤ながら、名物のギャア(渡辺光)先生も忘れることができません。大学院では、多田文男、岡山俊雄(勘に触る質問をし怒鳴られたことがありました)、矢澤大二、吉川虎雄、大矢雅彦などの諸先生の名講義や演習を受講でき、今でも私の財産となっています。原稿用紙の罫目を埋めながらも、お一人お一人のお姿が浮かび、懐かしさとともに諸行無常の感が漂ってまいります。

私自身は学部3年生の頃から、有志を募って「陸水学学習会」をつくり、河川や地下水の調査を始めておりました。学内には学園紛争の残り火があり、やや落ち着かない雰囲気がありましたけれども、それなりの活動ができ、多少の誇りをもって振り返ることのできる良き思い出の一つと

なっています。恩師・三井先生にはこの頃から顔を覚えていただき、種々のご指導を受けるようになりました。したがって、他の学生よりも早く先生の性格や行動の特性を知ることができました。学習会のメンバーの一人、大石哲朗君などとの会話の中での一致した三井先生像は「せっかちでエネルギーで足取りが年の割に異常に軽く速くて、その上、喋り口の速さも異常である」というものでした。しかし、四十の^{よわい}齡を迎える今、改めて振り返ってみますと、心の温かさ、人を拒まぬ度量の大きさこそ三井先生の本領であったように思います。また、先生は否定語の少ない学者でもありました。私共の質問に対してばかりでなく、学生の指導においても「こうしなさい、こうすれば良くなる」とはおっしゃっても、「そんなことをやっても無駄だ」ということは決しておっしゃいませんでした。私自身、博士論文は勿論のこと、あまり研究論文を書かない不肖の弟子ではありますが、一期一会とも言える先生との出会いがなかったら今の私はないものと思っています。研究業績で誇れるものもなく、大学院を退いた後の9年間、多少の反発の中で音信不通に近い不義理を重ねて参りました。しかし、3人の子供を育てる親となった今、静かに思いを巡らしみますとき、先生に教えて頂いたものは人生の基本となるべき「人としての心」であったことに気が付きます。また、先生のご自宅の研究室で、徹夜で原稿を仕上げたことなどを思い出しますとき、先生の奥様に対しても同じ思いが巡って参ります。公の

場でもプライベートな場においても、人に対する態度、心づかいのあるべき姿をさりげない言葉や所作の中で教えて頂きました。師から学ぶということは、何も学問ばかりではなく、人生を学ぶことでもあると思います。新渡部稲造の著名な言葉に「余は知識を教えるに非ず、常識（コモンセンス）を与うるのみ」というのがあります。常識の基礎となる「人としての心」をご教示頂いた三井先生、そして奥様に御礼を申し上げ、数々の非礼に対するお詫びの言葉とさせていただきます。

ところで、大学院に入った昭和51年度以降、先生の個人指導を受ける傍ら、河床変動論、水害論、水質汚濁問題、地下水塩水化問題など、多田文男先生の流れをくむ人々による自然環境の荒廃についての事例的研究の講義や演習が展開されました。ここでも先生はご自身の説は説として、我々院生に研究課題を強制されることはありませんでした。法政大学の学風の有難さ、三井先生の指導方針の有難さ、世に出て数多くの辛酸をなめてはじめて理解できることであるように思います。

地理学を学んだ者にとっての思い出はやはり、野外巡検や調査に尽きるようです。大学院入学以降の主なものを拾い上げても、厳寒の中での荒川水系水質調査、岩木川の総合調査、スウェーデン・ウプサラ大学のズンボルグ教授を案内しての利根川から草津・白根・日光にかけての巡検、群馬県骨材需給動向調査、千葉県村田川の汚濁機構調査、さらには静岡県岳南地域の自然環境の変遷に関する調査などが次々に実施され、これらは三井門下生が実績を上げる一助となりました。昭和57年度までに経験したこれらの調査・巡検の中で感じたことは、「先生はやはり、故郷の富士山周辺の自然環境の荒廃にこだわっておられる」との思いでした。故郷の静岡県岳南の地下水塩水化問題、田子の浦港の浚渫ヘドロの投棄場所として富士山麓や富士川河口が使われていることなどを調査した昭和57年の頃が最も精力的でありましたから……。先生はご退職後も、恐らく富士山周辺の自然環境にこだわりを持ち続けられるものと思います。弟子の直感として……。

調査・巡検の中でのもう一つの思い出は忘れ得ぬ人々との出会いであります。ご指導を仰ぎつつともに苦勞をしてきた人々、すなわち、佐々木茂、桑原正見、戸谷康義、井上奉生、佐藤典人、宮垣津繁などの諸先輩・先生方のお姿、そして後輩にあたる内藤次郎君の顔などが浮かんで参ります。三井先生には地理学を教えて頂くと同時に、人との出会いの場を造っていただいたものと思っております。物事にこだわらぬ親分肌の先生の周囲には、いつも人が集まって来ました。先生のご自宅の研究室での打合わせなどの語らいの数々も、古き良き時代の思い出として生き続けるものと思います。まさに過去は遠くになりけりではありますが、これらの人々との繋りは今後とも、私の人生を彩ってくれるものと信じております。この点においても、三井先生に感謝申し上げたいと存じます。

生生流転とは申しまして時の流れは人を待たず、寂寥感を禁じ得ません。しかし、傍らで垣間見た7年間ばかりか、風の便りの中での先生の生活はいかにも忙し過ぎたように感じられます。ここいらで、暫時静かなる時の流れに身を沈め、心身のお疲れを癒して頂きたいと思います。どうぞ、足と舌の回転のスピードを緩め、奥様の横顔を見つめる一時をお過ごし下さい。

私自身は、すでに三木清著『人生論ノート』にもある「良く隠れる者は良く生きる」という生き方に共鳴するほどに心身ともに老化してしまっているように思います。しかし、先生はご退職後も決して隠遁生活に入られることはないでしょう。先達てお会いしたときの血色の良さが、先生の今後の生き方を暗示しているようにも思います。どうか、奥様のお許しを得て頂きまして、四十老人の私を昔のように「研究者たる者、年に1回の学会発表・論文執筆はノルマなんだぞ。少しは研究しろ!」とどやしつけて下さい。そして、富士の裾野に私を連れ出していただきたいと思います。その日の近からんことを楽しみに致しております。そのためにも、酒量を減らし、いつまでもお元気でいらして下さい。

ユーゴスラヴィアにおける「ボラ」と「水」の調査

中 村 圭 三

(千葉敬愛短期大学教授・1977年度院修了)

このところ、スロベニア共和国とクロアチア共和国のユーゴスラヴィア連邦からの独立をめぐる内戦状況が、連日報ぜられている。

私は、このユーゴスラヴィアに向け、19年前の1972年9月に法政大学の「局地風ボラに関する気候地理学的研究」の調査隊員として出発した。隊員は隊長の吉野正敏先生、三井嘉都夫先生、渡辺一夫先生ほか4名の計7名であった。

三井先生は10月3日にルフトハンザ機でベオグラードに到着され、以後約1カ月間ご一緒に調査された。調査隊はベオグラードから西に移動し、クロアチア共和国の主都ザグレブを経由して10月13日にアドリア海に出た。

アドリア海の沿岸では、背後のディナルアルプスを吹き降りてくるボラの強さと風向に関する分布について、偏形樹を指標として調査した。三井先生はその調査の途中に、天水井戸などの珍しいものがあると、立ち寄って調査された。この付近は、世界的に有名な石灰岩地域である。人々は生活水を雨水に頼らざるを得ない。屋根に降った雨水は、雨樋(とい)によって地上に導かれ、石灰石でろ過した後に飲料水として地下の貯水槽に蓄えられていた。庭はコンクリートのたたきになっていて、その水は下の畑の溜池に導かれていた。

また、別な場所でローマ井戸を見つけられた。谷の中に5軒ほどの部落があり、石で囲ったところに降った雨水を溜めて共同で利用していた。我々は、10月19日、対岸のクルク(Krk)島に渡り、ここでも偏形樹調査にあたった。この島でも先生は、ある民家の天水井戸を調査された。この家には老夫婦だけが住み、鶏を飼い、自給的に野菜を作って、ひっそりと暮らしていた。太ったおばさんは黒い服を着、やせたおじさんは紺色の服につえをついていた。この服装はこの地域で一般的に見られるものだ。島は過疎化して、老人と子供ば

かり目立った。ちなみに、ここの天水井戸の水質はpH7.9であった。

アドリア海に浮かぶクルク島、ツレス島(Cer-s)、パグ島(Pag)などの偏形樹調査を終え、10月26日には、本土のザダル(Zadar)に到着した。ここで調査隊は2班に分かれ、ユーゴスラヴィアのアドリア海沿岸最南端のドubroブニク(Dubrovnik)までの偏形樹・植生調査をする吉野隊長班とクルカ(Krka)川沿いの偏形樹ならびに水の調査をする三井先生の班に別れ、私は三井先生の班に同行させて頂いた。

翌27日、調査班は出発した。最初にクルカ川の下流に位置するスクラディン(Skradin)で採水した。さらにその上流10km程の所は滝があり観光地になっていた。そこに着くや早速、数珠(じゅず)のようにヒモに通した干しイチジクをおばさんが売りに来た。滝を見て帰ろうとするとまた売りに来て、とうとう三井先生は買わされてしまった。この日は海岸の街シーベニク(Sibenik)のホテルに泊まった。この街はザダルと同様、古い街並で、斜面に街が形成されているため、階段が多い。

夕方になると広場と教会を結ぶメインストリートに若者たちが集まり始め、そぞろ歩きの大きな流れができる。右側通行でブラブラ歩いて行き、端まで行きつくとターンしてまたもどる。このブラブラ歩きを「コルゾー」と言い、コルゾーは若者達の社交の場でもあるらしい。我々は広場の前のレストランに入った。ここで珍しいもの食べた。ダルマチンスキプルシュー(Dalmatinski prsu)という豚肉のクンセイである。これは豚のモモ肉を地中海性気候と大陸性気候の接線にあたる地域で、ひと冬室内にぶらさげておいて作ったものである。これをツマミにしてワインでジベリ(乾杯!)といくと最高だった。その味はいまも忘れ

られない。

翌日、再びKrka川に向かい、シーベニックから約25kmのドゥルニツ（Drnis'）の街中で採水した。その近くのある家の前で、おぼさんがオケや樽の水を何やらやっていたので、三井先生が尋ねられると、水の中の不純物を沈殿させているのだという。その後、ワインの樽のある部屋に通された。1000リットルもあろう大きな樽が2～3個有り、いずれも赤ワインでなみなみと満たされていた。

その上にはダルマチンスキプルシューが三つ程ぶらさがっていた。ワインはザグレブに居る娘に売ってもらおうそうだが、プルシューの方は売らずに自分の家で食べるそうであった。

また、ここでは、だ円形の独特な形をした木製の水タンクをロバの両脇腹に付けて水汲みに行く少女と出会った。さらにKrka川を上流に進み、ボスナ・ヘルツゴヴィナ共和国との国境に近いクニン（Knin）に着いた。山の上に城跡があり、街は山腹にへばりつくかのように広がっていた。クルカ川にかかる橋の下で三井先生が採水している間に、私は城の写真を撮ろうとカメラを構えた。す

ると後で、モリンヴァス（Molinvas）と呼び止められた。振り返ると兵隊が写真を撮ってはいけないと言っていたのだった。

この辺は国境に近いこともあって兵舎が多く、接近観察、写真撮影禁止の立看板が目立ち、水などもうかうか採水できない所だった。この夜クニンのホテルに泊まった。ホテルは古い建物で天井が高く、部屋にはお湯が出ないばかりか、トイレに入ったら鍵が開かなくなり、ドアの上へよじ登って脱出するはめとなった。

翌29日は、クニンからズルマニア（Zrmanja）川を下ってサダルにもどった。その途中の道は、突然羊やニワトリが飛び出したり、大きなブタが居たり、ロバが荷車にトウモロコシを山積みしてのそのそ歩いていたり、車の運転は大変だったが、無事ザダルにもどった。この夜、三井先生とは最後の夕食になるということで、Ribljiという魚料理専門のレストランに入ってエビを食べた。むくのが大変で皆手を使ってもくもくと食べた。このことが後日語られ、大笑いとなった程であった。約1カ月間我々と共に調査をされた三井先生は、翌朝帰国の途に着かれた。

教室外での三井先生—地理学会議、巡検など—

橋 爪 若 子

（文政学園・1978年度院修了）

三井先生にはじめてお目にかかったのは、私が法政の大学院で地理を学ばせていただくようになった、もう20年以上も前のことです。在学中は先生のご講義を直接うかがう機会はありませんでしたが（指導教授は故大貫俊先生でした）、間接的にはいろいろとご指導いただきました。出身大学も専攻もちがいがいい、しかも社会人だったいわば「外様^{とさま}」の私を温かく受け入れて下さった先生方のご厚情に深く感謝いたしております。

みなさまもご存知の通り、三井先生はご専門の研究分野は云うまでもなく、大学内のさまざまな役職でも精力的な活動をつづけてこられました。ご活躍が過ぎたせいか（？）還暦のお祝いのあ

と、胃潰瘍で入院なさった時には、ご家族はもちろんのこと私共一同もずいぶん心配いたしました。その後しばらくはかなり自重しておられたものの、間もなく元のペースに戻ってしまわれたようです。

常に熱心なご指導ぶりで学生の人望を集めてこられた三井先生ですが、私個人の印象に強く残っているのは国際地理学会議（IGC）などの折に海外で接した先生のお元気なお姿です。

最初は1972年にモントリオールで行なわれた第22回IGC。この当時は日本からの参加者もまだ少なく、グループとして出発から帰国まで行動を共にした先生方のお名前やお顔は、ふた昔たった

今でも思い出せます。アルバムを眺めると、三井先生と故渡辺光先生が並んで楽しそうに笑っていらっしゃる写真があって、バンクーバーから東部までの大陸横断列車の中、バンフの町、そしてモントリオール大学の会議場やキャンパスなどでの先生方のご様子が目に浮かんできます。みなさまは大学内の宿舎に、私は市内の友人宅に泊まって（1960年代の後半ここに住んでいましたので）会議に通ったのですが、三井先生の発表の前日に英文原稿を読まれる速度、スライド使用のタイミングなど、多少のチェックをさせていただいたのも懐かしい思い出の一つです。それ以来、先生は海外での発表も回を重ね、自信をつけてこられました。

比較的最近の例では1988年のシドニー大学での第26回 I G C があります。三井先生はその直前まで大学野球部の関係でハワイに滞在され、東京に戻って翌日オーストラリアへという慌ただしさでした。プレ・コンGRESの巡検に参加されるため極めてハードなスケジュールだったにもかかわらず、開会式の朝シドニー入りした私たちを空港に出迎えて下さいました。先生はご自分の発表のほか多数の分科会や行事に参加なさったうえ、珍しく同行なさったお嬢様（健康の監視役？）のお付きあいで近郊へのツアーやオペラハウスにも出かけられるなど、相変わらずマメに動きまわっておられました。学会の終了後、三井先生、環境科学研究会常務理事の泉久三郎氏と私の三人でニュージーランドに向かいました。ポスト・コンGRESのエクスカージョンとして企画されていたものが、間際になって中止になったため、原案に近い旅程を独自で組んだのです。このことは拙著

「アオテアロア」（古今書院）にも書きましたが、短期間に南島から北島へ、都市から農牧地帯へと絶えず動きまわる、けっこう忙しい旅でした。三井先生はいっこうにお疲れの様子もなく、羊の毛刈り見学やクルージングなどを楽しまれ、機会をみては資料や地図の収集につとめられました。再びシドニーに立ち寄り、帰国の飛行機は別便になりましたが、お元気で後期の授業を始められたようです。さすがに「鍛え方」が違うと感服した次第ですが、これからはあまり無理をなさないように……。

この他、国内でも巡検などに関する思い出がいろいろあります。1980年に東京で開催された第24回 I G C では、分科会につづき三井先生の荒川巡検の通訳としてお手伝いさせていただきました。これ以前、1977年にウプサラ大学のズンボルグ博士が法政大学で講演された後、三井先生が草津・白根方面を案内なさった折にもお供しました。佐藤典人先生もご一緒でした。このような機会に強く感じるのは、先生が外国の研究者との交流を大切にしていることです。

また1987年春季の日本地理学会の巡検で丹那断層、三島湧水、富士市、韮山農協などを三井先生や法政の先輩のみなさまと共に見学したのも楽しい思い出です。この年の11月には法政の史学科・地理学科創立50周年が赤坂プリンスホテルで盛大に行われましたが、先生はこの記念行事の実行委員長をつとめられ、多数の卒業生に囲まれてお忙しそうでした。

ご退職後は学校でおめにかかる機会は減るとしても、学会や巡検などでお元気な先生に接し、ご指導いただけるものと期待しております。

三井先生の思い出

熊 田 宏

（川口市立元郷中学校・1980年度学卒）

早いもので、私が昭和56年3月に法政大学の地理学科を卒業してから、すでに10年以上の歳月が

過ぎました。その間にも、三井先生は、一介の卒業生にすぎない私に、さまざまな事を教えて下さ

いました。この10年間、私も中学校教師として、時には壁に突き当たる事もありました。校内暴力の嵐が吹き荒れた頃、ふと学生時代が懐かしくなり、先生の研究室を訪ねると、先生はいつも学生時代と少しも変わらぬにこやかな笑顔で迎えて下さいました。私は、どんなに行き詰まった時でも、先生に会えるだけで心の安らぎを覚えたものです。

過日、三井先生が今年度をもってご退職なさると聞き、大変残念に思うとともに、先生との数々の思い出がよみがえってきました。

庄川の現地研究では、今の仕事にも役立つ多くの、そしてなつかしい経験をさせていただきました。先生はよく、「地理をやるなら外へ出て、実際に見て歩いて地理的事象の把握をきちんと行わなければならない。」と教えてくれました。我々が庄川周辺の野外調査で歩き疲れた頃、疲れを知らない先生が、各ポイントのチェックのため楽しそうに歩き回っている姿を見て、気を引き締め直したことを覚えています。そして言葉に行動が伴わなければ人を動かすことは出来ないということ、を、深く考えさせられました。宿にもどり、デー

タの処理をした後の打ち上げ会では、参加者がそれぞれ夜遅くまで騒いでしまいました。さぞかし先生は、気苦労が絶えなかったのではないかと思います。

先生は、法政大学野球部の部長もなさっております。時々、東京六大学野球のテレビ放送があります。ベンチに背筋を伸ばして毅然と坐っている姿が、画面に映し出されると、テレビを見ている私の方が緊張し、思わず姿勢を正してしまいます。また、相変わらずお元気の姿を見て、ホッとすることもあります。

私には、おだてに乗り易いという性格があります。先生は、そのことを見通して、よくほめて下さいました。私にとって、これほどうれしいことはありません。そして先生は、教育者としてのどの学生にも同じように接してこられたのです。お忙しい先生にとって、これはとても大変なことだったに違いありません。先生の、学生の教育に対する一貫して変わらぬ姿勢を、私の目標としていきたいと思います。

最後に、三井先生に深く感謝するとともに、ご健勝をお祈り申し上げます。

先生が逃げた

内 藤 次 郎

(1980年度学卒、1989年度院修了)

私が法政に在学したのは1977年から1989年までの13年間で、その間、三井先生に御指導戴いた。何しろ青春時代の13年間のことだ。法政大学にも三井先生にも、共に言葉では言い尽くせない程の思い出が残っている。中には格調高い思い出も無いではないが、今こうして改めて振り返ってみると、どうもどうしても良いような事ばかりが思い浮かんで来る。やはり、あの事件のことを書いてしまおうと思う。

1982年の7月、三井先生の夏の現地研究のフィールドは、それまでずっと続いていた富山県の庄川から青森県の下北半島に突然変わってしまった。その後、翌83年と85年にも下北半島で実

施されて、私も助手として参加した。1982年7月14日の朝、当時の新幹線の始発駅であった大宮駅下りホームに、三井先生以下5人のメンバーが集めた。推定年齢順にいくと、佐々木さん、飯田さん、井上さん、地理学教室の佐藤先生、そして私であった。東北新幹線はその年に開業したばかりで、まだ物珍しかったせいか、皆さん心持ちニコニコとしておられた。酒臭い集団が仙台に着くと、さらに接続の特急に乗り換えて再び北上した。今度は発車直後に全員で食堂車にドヤドヤと移っていった。そこで何と何を注文したかもう忘れてしまったが、テーブル上には黒ビールとチーズの盛り合わせが並んでいたような気がする。三

井先生は、クラッカーの上にチーズをのせて、それをおいしそうに口元へ運では黒ビールをめしあがっておられた。そして「いやー、僕はこうして北上山地のなだらかな風景を眺めながら黒ビールを飲んでいると、ヨーロッパの旅を思い出すなあ」とおっしゃって目を細めておられた。野辺地駅までむつ市役所の方々が車で迎えに来て下さるということだったので、皆さん量の方はひかえ目であった。井上さんだけは、マイペースで沢山飲んでおられた。この一行を迎えるために、片道約60kmの距離をやって来られたのは、三井先生が資源科学研究所におられた頃からの顔見知りの市職員の方々であった。陸奥湾の荒涼たる風景をずっと左手に見ながら、車は信号の無い緩やかな起伏のある道路をひた走った。偏形樹の続く殺風景な海岸線が冬の烈風を思わせた。大湊の岸壁にはオレンジ色に塗られた原子力船むつが係留されて、荒れた工場跡地の向こう側に見え隠れしていた。田名部に着くと、宿の常念寺に挨拶をして荷物を置き、それから早速、市役所主催の歓迎会に出向いていった。真夏だというのに下北の夕刻は寒い。東京の気温に慣れた肌には痛みを感じるような寒さだった。この地で、先生方は1955年以来、地元の下北総合開発期成同盟の人達と共に農業開発のために自然環境基礎調査をやってこれらたのだ。当時の期成同盟のメンバーで、現在、市の幹部になっておられる方々との懐かしい話は遅くまで尽きなかった。昭和30年頃、調査用の車両が市に不足していたため、消防車に乗って現地をまわられた話なども初めて聞かされた。自分が生まれる2年前のことだと思いながら、私は話し声に耳を傾けていた。夜が更けて散会し、静かになった町を我々は常念寺へ急いだ。

三井先生を中心とした旅行では、メンバーが宿に落ち着くと、決まってその晩の寝場所をめぐる無言の駆け引きが展開される。その原因を御存知であろうか。1978年の10月に新潟で開催された日本地理学会の時、出発前に佐藤先生は「三井先生との同室だけはねえ……」とおっしゃっていた。OBの宮垣津さんと池さんも同じことを言われた。私も前年の庄川巡検の助手として先生に同行

した時、隣室からのその響きを明け方まで断続的に聞かされていた。先生は「大の男が、他人のいびきぐらいで眠れないなんて、そんなだらしなことではねえ、ハッハッハッハッ」とおっしゃるのだが、いかに大の男であろうと、あれはやっぱり辛いものだ。皆疲れていたもので、直ぐに横になる準備にとりかかった。佐々木さんは野武士のように落ち着かれた表情で、無言のまま三井先生の隣に布団を敷かれた。井上さんは常備薬が充分効いておられるので、もとより場所などまったく関係ない。他の三人はそれなりに熟慮してそれぞれ寝床を敷いた。夜が更けてやがて始まった、今夜もまた物凄い。闇が大きく揺れ動いた。「どんな夜でも必ず夜明けはやってくる」と自分に言い聞かせながら、私は朝まで堪えるつもりでいた。だが、しかし、その夜は様子がおかしかった。何とそれはステレオで鳴り響いていた。これは全く予期せぬ出来事であった。その時、部屋の中でゴソゴソ音がして、泥酔していたはずの井上さんが布団を引きずって廊下へ消え去ってしまった。三井先生の言葉に縛られて一人堪えていた私は啞然とした。よし、大先輩の後に続け、と思った時、ステレオの片方が鳴り止んだ。再び部屋がゴソゴソ動いてふすまが開いた時、廊下の電燈は自分の布団を引きずって彼方へ去ろうとされている三井先生の後ろ姿をはっきりと照らし出した。あっ、先生が逃げた！一瞬心の中で叫んだ時、先生は振り返られて私と目が合った。そして、お顔だけエッヘッヘと照れ笑いされて、そのままズルズルと何処かへ去って行かれた。勿論、私も残された佐藤先生の安否を気遣いつつ、すぐに逃げ出した。

三井先生が他人のいびきでお逃げになったのは、後にも先にもこの時だけだったろうと私は思う。まったく変な事件の生き証人になってしまったものだ。忙しい日常生活に追われて、既に学生時代の多くの出来事をはっきりと思い出せなくなってしまった。しかし、私はあの時の三井先生の後ろ姿だけは長く覚えていることだろう。

最近のことであるが、私もごく稀に、妻から「お父さん、ゆうべはいびきが凄かったわよ」と言われるようになってしまった。私もそろそろ加

害者の側にまわりつつあるようだ。時の流れを感じてしまう。

三井先生が法政大学を退職されるにあたりまして、お世話になりました学生の一人として先生に

心から御礼申し上げますと共に、御健康をお祈り申し上げます。

(10年近くも前の話ですので、筆者の勘違いによる誤述がありましたならお詫びを申し上げます)。

学ぶよろこびを育んでくださった三井先生

徳 竹 喜 義

(1985年度学卒)

三井先生が定年退職を迎えられるとうかがい、大変寂しい気がいたします。先生に学んだことは私にとって大きな誇りです。特に、専門教科が多くなる3年の時から卒業に至るまでに先生から学んだことは学術的な研究課題にとどまらず、自然と人間・自然と社会のつながりを主体的に学び、それを生き方に大いに活かしていこうという人生観でした。

この度、先生との思い出を綴ることになりましたが、私にとっては大変光栄なことです。心から感謝申し上げます。

ユーモアにあふれた授業

人文地理学かそれとも自然地理学か、私がそれで悩んだのは2年の終わり頃でした。3年になって高校時代(法政二高)からの友人に誘われて先生の「海洋・陸水学」の講義を受けることになりました。その友人は高校時代から化学部に属し、主に多摩川の水質汚濁について研究をしてきた優秀な学生で、入学当初から三井先生の指導を望んでいました。友人からすればまったく志は低く主体性に欠けた私だったのですが、結果として、先生を通して自然地理学に引かれていきました。

講義は海洋学の通史にはじまり、時には古い航海図を用いてアメリカ大陸やオーストラリア大陸発見のエピソードをユーモアいっぱいに話してくださいました。講義が終わってもしばらく教室にいと、いろいろな種類の地図を見せてくださり、「研究室に来ればもっと古い地図がありますから」と、声を掛けてくださいました。

ところで、この講義は公開講座となっていたこともあり、多少騒がしいことがありました。しか

し、先生は決して「怒鳴る」ことをしませんでした。逆に、講義のテーマから“おしゃべり”のことについて巧みに話題を転換し、「発生源」の学生に問いかけていきます。そして、また全体を講義に引き付けていくといった具合です。

こんなことがありました。

先生 「あの大航海時代、船は大河に流れる落ち葉のように進んでいったんですね」

(おしゃべりのトーンが高くなる)

先生 「もしですよ、嵐のとき皆がてんでに、われわれの今のようだったら船はどうなるでしょう？はい、じゃあその……君」

学生 「……、本当のインドに行っていました」
(教室爆笑)

実践的な調査に学んで

地理学科は現地研究(巡検)が必修となっています。私は3年から三井先生の担当する巡検すべてに参加しました。

自然を相手に学ぶとはどういうことなのかを示してくださったのは富士山麓の湧水を調べる巡検のときのことでした。富士宮市のある製紙工場内の自噴水井戸から湧き出る水量を計ってみようということになりました。まず、先生は井戸の下から真直ぐにのびるU型の側溝が湧き出た水をほとんど集めている所に私たちを導きました。そして、側溝の断面積をボール紙で合わせ、スケールで水位を測り更にストップウォッチで浮きの流れる距離を何回も測りました。それらのデーターを計算機に打ち込み、水量を割り出してみせました。極めて実践的で印象に残る場面でした。

先生の一言

私が卒論のテーマを「多摩川の塩水遡上」としたのは4年に進級して三井先生のゼミを受けてからのことでした。ゼミでは先人の研究者の論文を数多く読み、それを各自が45分間にまとめて発表するものでした。ゼミの学生からの質問もさることながら、先生の質問にしばしば立ち往生したものです。

私の場合、「多摩川に海水が上がってくることによって、かかる地域にどんな影響があるのですか」という質問を絶えず受けました。自らの不勉強さをその問かけがズバリ指摘しているようでした。

4年も後期に入る頃、先生から「卒論のテーマ設定は大変興味深いが、それによって塩害が出ているのなら別ですが……。論文としては本質的に断定が可能になるような何かを見つけなくてはなりません」と、指摘を受けました。それから、私は多摩川の河床変動や地形、更に水質汚濁との関連をとくに重点に置いて調べることにしました。

建設省関係の官庁に足を運ぶときにはどんなに忙しくても紹介状を書いてくださったことで、思いもかけず内部資料の閲覧ができたこと、また、先生所有の資料を惜しみ無くお貸しいただいたことなど、卒論完成まで親身になって指導してくださいました。

内容の善し悪しは二の次にして、ようやく卒論ができました。できた論文を先生はすぐに読んでくださり、一言、「徳竹君、論文が終わった所からまた多摩川がおもしろくなったんじゃないです

か」と、評してくださいました。

先生の部屋

私は先生の部屋を訪ねたことがあります。それはゼミの友人と3人で卒論の執筆前に草稿を持って伺った時です。

そこで印象に残っているのは先生の机と椅子です。机の下に足を暖めるヒーターが木枠に工夫されて収められており、椅子は先生の体格に合わせて幾重にも布あてや綿入れが巻かれていました。研究に取り組む厳しさをその机や椅子のたたずまいから感じました。「佐藤先生（佐藤典人教授）も学生時代この部屋で研究していたんですよ」と、思い出ばなしも聞くことができました。

学ぶよろこびをしっかりと受けとめて

先生には卒業した後就職のことでいろいろ援助していただきました。思えば、法政二高時代（私は生徒会長をしていました）、その卒業式に同じ舞台に立たれ、大学を代表しての祝辞をいただいたのが三井先生からでした。本当に長い間お世話になりました。

いま私は仕事の傍ら「多摩川を愛する会」という市民団体に入って活動しています。多摩川に高速道路（川崎縦貫道路）の計画があると聞いたからです（その後、ルート変更が発表されました）。

先生からのあの一言が多摩川と私を今もしっかりつないでくださっています。

先生、本当にご苦労さまでした。どうかこれからも元氣でご活躍ください。そして、いつまでも私たち卒業生に対してご教授くださいますようよろしくお願い致します。